
誇り高く、静謐に咲く花

かや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誇り高く、静謐に咲く花

【Nコード】

N6551D

【作者名】

かや

【あらすじ】

それは、一人の皇妃のお話。話をしよう。この帝国で、一番哀れな皇妃と言われる女性ひとの話。誇り高く、静謐せいひつに咲く花のごとく、生きた皇妃の話を。特別な才能もなく、それでも自分の人生を、己が力で切り開いて行った、一人の女性の話を。

1 (前書き)

馬の鋭い^{いなな}嘶きに、フィリシアは目を細めた。

雪でぬかるんだ土の道に、馬車の後輪が入り込んで、動かなくなっている。

従者の男達が馬をせかして、ぬかるみから馬車を運び出そうとしているが、馬車は、なかなか動かなかった。

苛立ちを感じ、フィリシアは髪の色と同じ、薄茶の眉を寄せる。

「フィリシア」

そんなフィリシアを宥めるように、落ち着いた女性の声が、フィリシアの名を呼んだ。

「—オリガ様」

フィリシアの名を呼んだ女性は、焚き火の火種を起こそうとしていた。

黒髪に、黒い瞳。

どちらも、『神の化身』と言われる者達にしか授けられないものだ。

その長い黒髪は、火を起こすために邪魔なのか、いつのまにか、縛ってあった。

「こういう時は、上にいる者が慌てても、ろくなことはないぞ」

そう言いながら、オリガは種火に息を吹きかけた。その姿は、どう見ても、プライジャリ・マリ—この国一番の公妃と意味である—と呼ばれ、『神の化身』とも言われ、さらにこの国の皇帝の姉でもあるこの女性には、似合わなかった。

そもそも、火起こしは、下働きの者がする仕事の一つだ。

なのに、オリガはそれにかまわず火を起こし、湯を沸かそうとしている。

その様子をじっと見つめていると、視線に気づいたのだろう。

「時間を持て余すなら、そなたも手伝え、フィリシア」

と、オリガが言った。

「……オリガ様は、焦るお気持ちはないのですか？」その態度は、とても落ち着いていた。

慌てる様子も、苛立ちも、感じられなかった。

どうして、そんなことができるのだろう？

「フィラルシーが、危篤なのですよ！？」

あなたの娘が。そして、私の異母妹が。

白い息が上がった。

パチツと音がして、火が勢いよく燃え上がる。

「焦ったところで、どうなる？」

「オリガ様っ」

「従者達を責めるのか？ 彼らは、よくやってくれておる。この悪天候の中、今でも馬車を動かそうと必死になって働いてくれておる……間に合わなかった時は、その時じゃ。天命には、逆らえぬ」

淡々と、オリガは言った。

―フィリシア。

その瞬間、自分の名を呼ぶ、フィラルシーの笑顔が、脳裏に浮かんだ。

フィラルシー……フィラ。

自分の、異母妹。

明るい瞳をした―唯一の、心許せる存在。

そんな自分にとって大事な存在を、この世に生み出してくれたのは、この女性だ。

その女性が―覚悟をしている。天命には逆らえぬ、と。

「……だいじょうぶじゃ」

「……オリガ様」

「あの子は、わたくし達が着くまで待っていてくれる。だから―そなたも、落ち着いて、今自分ができることをするが良い」

「今、自分ができること……」

フィシアは、オリガの言葉を、噛み締めるように呟いた。

すつと、オリガが湯を沸かすため、銀のポットを手に立ち上がった。

羊の毛を糸にして編んだ手袋をぬき、綺麗な雪が積もる、土手になっている方へ足を向ける。

「オリガ様、そのようなことは、僕達がしますから」

それに気づいた、まだ年若い、赤毛の髪をした少年が、オリガに駆け寄ってきた。

おそらく、御者見習いの者だろう。

フィリシアは、その少年を見知っていたが、名前までは知らなかった。

「よい、セルゲイ。そなた達は、馬車をはよう動かすことに全力を注いでくれ」

しかし、オリガは少年の名を呼び、そう言った。

「しかし、オリガ様」

「茶を入れることしか、わたくしにはできぬ。……できることを、させてくれ」

ふつと、哀しげな微笑を浮かべ、懇願するように、オリガは言った。

年も身分もはるかに違う、年若い従者の少年に。

「……わかりました」

少年は頷くと、馬車を動かしている仲間達のところに足早に戻って行った。

ザクザクと少年が雪を踏みしめて戻る姿を、オリガはじつと見送った。

そして、その後で雪の上にしゃがみ込むと、白い雪を手ですくい始めた。

上質な毛織物で作られた上着が濡れようと、気にはしていないようだった。

―どうしたら、あんな風になれるんだろう。

そんなオリガを見つめながら、フィリシアは思った。今の自分は、

二十四歳。

十七年前のあの頃のオリガと、今の自分は、同じ年だ。だけど、未だにあの人のようには、なれない。

あの人のようには、振舞えない。

ザクツと、フィシアは足を踏み出した。

鹿の皮を何枚も重ねて作った長靴でも、雪は、フィリシアの足先に冷たさを伝えてくる。

それでも、オリガのいる場所まで、歩くのを止めようとは思わなかった。

この世界で、一番の広さを誇るアリシア大陸。

その大陸と同じ名を持つアリシア帝国は、大陸のある十五の国の中で、国土の広さ、軍事力、そして何よりも経済力の大きさから、大陸の中心としての立場を担ってきた。

金のあるところに、人が集まり、それゆえに権力もまた集まる。

だが、アリシア帝国の特異性は、それだけではなかった。

帝都ムーア。東都。西都。南都。北都。

その広い国土を治めるため、国を四つの公国に分け、その公国を、それぞれの公主が統治するやり方を取っていた。

これは、大陸では、唯一アリシア帝国だけが行っている統治のやり方である。

しかし、公主はあくまでも皇帝の代理人であり、皇帝に逆らうことは許されていなかった。

皇帝が住む帝都ムーアは、温暖な海岸線にあり、ゆえに、大きな貿易都市としても知られている。

北都は、大陸一の豪雪地帯にある。

南都は、帝国の最南端に位置し、気温が一年を通して高く、冬でも暖かい。

大陸のちょうど中心にある、東都は、草原の中にあり、公国の者達は、牧畜を生業とする者達が多かった。

そして、他国と国境と接する西都は、公国の半分が砂漠である。

広い国土のために、住む場所により、気候が違う。

気候が違うゆえに、住む人も、習慣も異なってくる。

帝国が四つの公国に分かれ治められているのは、異なる習慣・文化を持つ人々を、上手く治めるために考え出された手段なのだ。

そう「初代の皇帝・エドアールは、大変偉大な皇帝であった。いい意味でも、悪い意味でも。」

そして、現在の皇帝は四代目―偉大な曾祖父と同じ名を持つ、エドアール二世。

赤い髪に、青色の瞳を持つ彼は、三十一歳の青年皇帝である。十歳年上の姉・オリガは、十六歳の時に南都を預かる南都公主・ガイーに嫁ぎ、一男二女をもうけた。

そして彼自身は、ガイーの庶出の公女を正妻としてめとっている。アリシア帝国では、皇家と公主家、また公主家同士の婚姻は、庶出の娘をめとることが好まれていた。

帝国内でも、絆を深めるため婚姻は盛んに行われていた。

だが、それゆえに血は濃くなりがちである。それを避けるために、公主や皇帝は、己の庶出の娘を嫁がせるのだ。公妃の娘は、皇家の場合は他国に嫁ぐ。

また公主家の場合も、皇帝の養女として他国に嫁いだり、親族のもとに嫁ぐのがほとんどだった。

ちなみに、ガイーに嫁いだオリガは、先代の皇帝とその皇妃の子であつた。

オリガとエドアールの母である皇妃を、深く愛した先代の皇帝は、歴代の皇帝や他の公主のように、側室を置かなかったのだ。

これは、アリシア帝国でも、異例のことである。

実際、南都公主ガイーには、第一公女・フィリシアを生んだ愛妃がいた。

しかし、このガイーも、ある意味では異例の存在だった。

彼は、愛妃を何人も持てる立場でありながら、愛妃はただ一人―少年の頃から寵愛していた愛妃・セーレンのみであつた。

だが、一番異例なのは、現在の皇帝・エドアール二世だろう。

彼は、皇妃・フィリシアとの間に王子・ロイドをもうけてはいるが、それ以外に子はいなかった。そして―愛妃もいなかった。

歴代の皇帝や公主達が、愛妃を持つ理由の一つは、子を多く持つためだ。

血は、政治の上で大きな武器となる。

しかし、彼は臣下の者達に公言していた。

『私は、皇妃以外の妻はめとらぬ。子も、ロイド以外持たぬ。皇妃との間に子を成し、私は皇帝としての責務は果たしたのだから――』と。

フィリシアがその女性むすめの存在を知ったのは、七歳の春だった。
フィリシアは、それまで、自分の周囲に何ら疑問を抱くことはなかった。

数人の使用人―主に侍女である―に囲まれて暮らすことも、日常は母と共に部屋で静かに過ごし、父にはめったに会えぬことも、何ら不思議に思っていなかった。

ただ、乳母から勝手に母と暮らす棟から出ることだけは、固く禁じられていた。

「いいですか、姫様」

乳母は、侍女達が毎日磨く、白い大理石の床を指しながら言った。
「あちらから先へは、決して行つてはいけません」

乳母の言うあちらとは、庭へと続く出口のことだった。

―後で、知ったのだ。その出口は庭から、オリガとフィラルシーの住む棟へと続いていたことを。

だけど、その頃のフィリシアは何も知らなかった。

だから、素直に頷いた。大好きな母親に、

『乳母を困らせてはいけませんよ』

と、言われていたこともあった。

フィリシアの母・セーレンは、もともとガイーの母―つまり、フィリシアの祖母の侍女だった。

最初、下働きの下女として館に入ったセーレンを、祖母がその利発さと気立ての良さを気に入る、侍女にしたのだ。

そして、祖母の傍に仕えていた彼女を、まだ少年だった父が見初め―彼女は、望まれて愛妃となった。

オリガがガイーに嫁いで来る、五年前の話である。

だから、セーレンは皇族の出でも公主一族の出でもなかった。

―孤児。出自も明らかでない、下賤の者。彼女が下女として館に

上がったのは、世話になった孤児院のためだったのだ。

母は、明らかに自分の出自を恥じていた。

下賤なる身分の自分が、恐れ多くも公主の子を生んでしまったと
|。

そのせいか、フィリシアにも「自分の娘」としてではなく、「南都公主・ガイーの第一公女」として接していた。

『あなたは、恐れ多くも、公主・ガイー様の第一公女ですよ』

母は、フィリシアがする事に「公女」としてふさわしくないことがあると、眉を寄せ、哀しげな声で言った。

例えば、外で泥遊びをすること。

人前で、声を上げて笑うこと。

そして――時々母がしている、庭仕事の手伝いをする事。

不思議に思った。

母がすることを、どうして自分がしてはいけないのか。

でも、いつも言われていた。

『あなたは、私とは違います』と。

――どこが違うのですか、母様。

自分と母は、よく似ていた。

薄茶の瞳に、金髪に近い髪の色は、母から受け継いだものだった。

だが、母は言うのだ。

あなたは、私とは違う。南都を預かる、公主・ガイーの第一公女
なのだから。

その言葉が、どれだけフィリシアを孤独にするか、気付きもせず
に。

だがその女性の――正確には、その女性とその女性が産んだ、異母
妹の存在を知るきっかけは、向こうからやってきた。

その日は、朝から良く晴れていた。

天窓から入る日差しは優しく、春らしい陽気だ、フィリシアにも

感じられた。

陽光の差す南側は、ガラスの窓があり、母が丹精して育てたピンク色の花が咲いているのが見えた。

優しい陽気と、綺麗な花を見ると、外に遊びに行きたくなる。

しかし、母が外で遊ぶことをあまり良しとはしていなかったので、フィリシアは我慢した。この頃の自分は、外に行くのは乳母と共に、庭を散歩する時だけだった。

だから、驚いた。自分と同じ年ぐらいの女の子が、ピンクの花々が咲く花壇の傍に、現れた時は。

そして、その髪を見て、さらに驚いた。

女の子の髪は――黒。

フィリシアはそれまで、黒の髪を持つ人間を見たことがなかった。さもありなん、この世界に黒い髪や黒い瞳を持つ人間はめったに生まれない。

黒髪・黒い瞳は、大神・ムーアと大地の神・メーアの間生まれ、水と平和の女神ユスのもの……つまり、「神の色」なのだ。

それゆえに、黒髪や黒い瞳を持つ者は、女神・ユスの化身だと考えられていた。

実際、体の一部に「神の色」を有する者達は、何らかの「力」を秘めているが多かったのだ。

もちろん、その当時のフィリシアは、その辺のことは何も知らなかった。

しかし、女の子の持つ黒髪がめったに見られないことは、わかっていた。

母とも、父とも、乳母とも、この棟にいる誰にも似ていない、夜の闇の色。

フィリシアは、思わず目を見張ってしまった。

一方、女の子の方は、フィリシアの視線にも気づかず、何かを無心に引き抜いている。

「――ねえ、何しているの？」

窓を開け、声をかけたのは、フィリシアの方だった。

声をかけられた女の子は、地面からフィリシアの方に視線を上げる。

その瞳は――紫。これもまた、「神の色」だった。

大神ムーアと、地神メーアの間生まれた、戦と風の神・アルロ。紫の瞳と、紫色の髪を持つ彼は、姉神・ユスとは正反対の、激しい気性の神とされている。慈愛の神と、破壊の神。

正反対の気質を持つ神を守り神とした、南都公主第二公女・フィラルシー。

その呼称をフィリシアが知るのは、まだ後のことだ。

この時は、瞳までも見たことがない色を持つ少女に、ただただ、びっくりしていた。

「草取りをしているの」

女の子は――フィラルシーは、そんなフィリシアに、につこりと笑いながら答えた。

「草取り？」

「そう。こうやって、草を取ると、綺麗なお花が咲くんだよ」

その言葉に問い返すと、フィラルシーは、笑顔のままそう教えてくれた。

でも、フィリシアは、そのことは知っていた。

母が同じようなことをしていて、何をしているのか聞いた時、教えてくれたのだ。

しかし母は、フィリシアがその作業を手伝うことは許さなかった。なのに――それなのに、この黒髪と紫の瞳を持つ女の子は、自分が許されなかったことをしている。

「あなたの母様は、そんなことをして、怒らないの？」

そうフィリシアが聞くと、今度はフィラルシーの方が、きょとんとした表情になった。

「うっん、しないと怒るの。自分のことは、自分でなさいって」

「そうなの？」

「うん。きれいなお花が欲しいなら、自分で育てなさいって……」

「……」
フィリシアは、信じられなかった。自分の母と、逆のことを言う人がいるのだ。

「あなたの母上は、怒るの？」

一方フィラルシーは、そちらの方が信じられないという感じで聞いてくる。

「うん……私は、しちやいけないんだって」

「なんで？」

「私が、ガーイ公の……父様の、第一公女（むすめ）だから」

「あれ？ でも、それは私もだよ」

そして――知るのだ、自分は。

半分だけ血が繋がる、異母妹（いもむすめ）の存在を。

「えっ……？」

「ガーイって、父上のお名前なんだもの。じゃあ、あなたは、フィリシア異母姉様（ねえ姉さま）？」

「私のこと、知っているの？」

「うん。母上から、聞いたの。私には、フィリシアっていう異母姉（ねえ姉）様がいるって」

「……」

自分の母は、教えてくれなかった。この黒髪と紫の瞳を持つ異母妹のことを――何一つ。

「あなた……名前は？」

「フィラルシーっていうの。『暁』っていう意味があるんだって」

暁――太陽。

そう言っ て笑う異母妹の表情は、その名の通り、輝いて見えた。

このことがあってから、フィラルシーは、フィリシアが住む棟に遊びに来るようになった。遊ぶと言っても、フィリシアは外へは

出ず、フィラルシーの方も棟の中には入ってこず、窓越しで話すくらいだった。

二人とも、幼いながらも感じてはいたのだ。

棟は違うものの、同じ屋敷に住みながら、一度も会うことがなかった異母姉妹。^{きょうだい}

おそらく、母が―自分の周囲が、公妃の娘である異母妹と関わることを、望んではいなかった。

そう。『神の色』を持つ公妃・オリガの、二色の『神の色』を持つ娘。

母にとってフィラルシーは、尊き存在であり、そしておそらくは、忌むべき存在だったのだろう。

自分が持たぬものを全て持つ存在^{ひと}が、自分の愛する者と生み出した、素晴らしい結晶晶。

そう、思っていたに違いない。

だから、フィラルシーがフィリシアの所に訪れるようになって何回目かの時、母に見つかり―その時の母の反応を見て、ああ、やっぱりな、とフィリシアは思った。

当時七歳だった自分が、想像していたとおりの反応を、母はしたのだ。

その日。花壇の手入れをしようと庭に出た母は、窓辺越しにフィリシアと話すフィラルシーの姿を見て、持っていた園芸用の道具を、全て地面に落とした。

その音を聞き、窓越しで話していた自分達は、音がした方を向いた。

なんの音？ という感じで。そして、顔面蒼白になって、庭に佇んでいる母に気づいたのだ。

「フィラルシー様！？ 何故ここにいらっしゃるのです！！」

次の瞬間、悲鳴に近い叫びを母は上げた。

日頃の母はとても大人しくて―そんな声など、一度として上げたことはなかった。

だが、その時の母は、その顔に、嫌悪と畏怖の表情を浮かべていた。

その表情を見て、フィラルシーは沈んだ表情になった。

さっきまでは、確かに、楽しそうな表情かおをして、自分と話していたのに。

「公妃様はご存知なのですか!？」

「……ごめんなさい」

フィラルシーは、ペコリと母に頭を下げた。

その態度に、母は息を飲んだ。母にとっては、公妃の子に―それも『神の色』を持つ子に、素直に頭を下げられることなど、「恐れ多い」の他、なかったのだろう。

「止めてください。私はあなたのような方に、頭を下げられる身ではありませんっ」

たった七歳の幼子に、必死になってそう言った。

その幼子が、自分の娘と同じ『哀しみ』の表情をしていると―気付きもせずに。

「姫様、どうかしましたか？」

庭の騒ぎを聞きつけたのだろう。乳母が、フィリシアの部屋に入ってきた。

そして、彼女はフィリシアが座る窓辺に近づき、庭にいるフィラルシーに気付いた。

「フィラルシー様!？」

その瞬間、乳母も大きく目を見開いた。

「抜け出してしまったらしいの……どうしましょう、カレーナ様」

その乳母に、母が途方にくれたように言った。

母は、乳母のことを、『カレーナ様』と呼んでいた。

乳母が、父の乳母でもあったせいだ。

彼女は、育てた主の最愛の人を守るために、フィリシアの乳母となったのだ。

それだけの知識と経験が、彼女にはあったのだ。

だから、すぐさま乳母は母に助け舟を出した。

「使いを出して、迎えに来ていただきましょう」と。

その言葉に、母はほっとした表情になった。

……私達は、一緒に遊んではいけないのですか？ 母様。

その表情を見て、フィリシアはそう尋ねてみたかった。

だがー尋ねることは、できなかった。

「お上がりください、フィラルシー様。使いが来るまで、お菓子と温かい飲み物を頂いてください」

乳母はフィリシアに背を向けて、フィラルシーに言った。

母の方も日頃の穏やかさを取り戻し、どうぞこちらへと、フィラルシーを案内し始めている。

二人とも、フィリシアが尋ねていたら、きっとこう答えるだろうということとは、わかっていた。

『あの方と、あなたは違います』——寸分の違いもなく。

「フィラルシーが世話になったと、オリガが申しておったぞ」
その日の夜。

めずらしく、フィリシアが起きている時間に父が尋ねて来た。

そして、部屋に入るなり、そう言った。

「公妃様が？」

「ああ。フィラルシーは、好奇心が強いようだ。どこそこと出かけて行く。この間は、わしの執務室まで来おったわ」

「まあ……末頼もしいこと」

父の言葉に、母は笑った。その笑顔は満足気で、とても綺麗に見えた。

父と共にいる時、母はこんな表情をよくする。

今なら——言っても、許してくれるだろうか。

フィラルシーと、母の違うあの妹と、これから会いたいと。

フィリシアは、フィラルシーのことが好きだった。

フィラルシーといると楽しいし、何よりも、年頃の子とも遊ぶという経験が、フィリシアにはそれまでなかった。

ねえ、母様。私、フィラルシーと、これから会いたいな。

喉まで、その言葉が出なかった。だけど。

『ダメですからね、姫様』

乳母の言葉を、思い出す。

それは、フィラルシーが迎えに来た使者と共に戻ってしまった後、自分の部屋で乳母が言った言葉だった。

『フィラルシー様が、またこちらに訪ねて来られた時は、今日のようには遊ばず、すぐに私か母上様にお知らせください』

『フィラルシーと……あの子と遊んじゃダメなの？』

『フィリシア様』

自分を見上げ、必死な表情で聞くフィリシアに、乳母はため息を付いた。

『ダメなの？』

だが、フィリシアはあきらめきれず、もう一度聞いてみる。

幼いフィリシアに、大人の事情はよくわからない。

でも、大人達がフィラルシーと自分が仲良くなることを望んでいなくても、あきらめることはできなかった。

けれど、乳母の言葉は変わらなかった。

『わがママを言わないでください、姫様』

『……』

『フィラルシー様に、もし何かあった時、一番困られるのは、母上様なのです』

姫様にはまだわからないかもしれませんが、と乳母は言葉を続け、
『母上様を、困らせてはなりません』

ダメ押しのように、言った。

そこまで言われてしまえば、フィリシアは黙るしかない。

「どうしたのだ？ フィリシア」

何か言いたそうな表情で、だが黙っている娘に気付き、ガイーは

声をかけた。

フィリシアの、母とよく似た茶色の瞳が、微かに揺れた。だが結局、何も言わなかった。

そうして、行儀よく座っていたビーロドのソファから、びよんと飛び降りた。

そのまま、ドアに近づくと、カチャツと扉を開いた。

「どこに行くの？ フィリシア」

母親の声が、後ろから追いかけてきたが、

「乳母のところ」

短く答え、フィリシアは部屋を飛び出した。

父がいて。母がいて。だけど、息苦しかった。

父のことも、母のことも、そして乳母のことも、自分は好きだった。

それはまちがいない。だけど。だけどー。

気が付けば、フィリシアは中庭に出ていた。

母が育てたピンクの花が、夕闇の中咲いていた。

ここで、笑っていたのだ、フィラルシーは。

黒い髪と、紫の瞳を持つ、自分の異母妹^{いもめい}。

『外に出て、遊ぶことができないの』

そう言った自分に、

『じゃあ、ここでお話しようよ』

と、笑って答えてくれた。

今までなら素直に聞いた。

母の言うことも、乳母の言うことも。

本当は言いたいことがたくさんあったけど、我慢してきた。

でも、フィラルシーと遊ぶことを禁じられることは、どうしても我慢できなかった。

それがどうしてなのか、自分でもわからないけれど。

きゅっと、ピンクの花を見つめながら、フィリシアは、やわらかい白のドレスの裾を握りしめた。

と、その時だった。

>フィリシア……。フィー<

耳元で、ふわりと風のように声が通り過ぎた。

「え？」

思わず、フィリシアは辺りを見回す。

だが、そろそろ夜の闇に染められつつある中庭には、自分以外、人の姿はない。

>よかった。聞こえるんだく

しかし、『声』は確かに聞こえて来る。

「もしかして……フィラ!？」

仲良くなるにつれ、二人は互いのことを、愛称で呼ぶようになっていた。

フィラルシーのことは、『フィラ』。フィリシアのことは、『フィー』と。

「どうして、フィラの声が聞えるの？　もしかして、近くにいるの？」

ううん。お館にいるよ。あのね、風に声を運んでもらっているの
「そんなこと、できるの？」

うん。フィーの声も、風が運んでくれているよ。でも、人に見つ
かったらダメだから、小さな声でしゃべってね

「あ、うん」

フィリシアは驚きのあまり、大きくなってしまった声を、あわて
て小さくした。

「すごいね、フィラ」

それでも、フィラルシーの不思議な「力」に感心するあまり、声
が弾んでくる。

あんまり使っちゃダメって言われているんだ。でも、フィーとお
話したかったから

「それはわたしもだよ、フィラ……」

だが、フィラルシーのこの言葉に、しゅんっとなってしまう。

乳母や母があゝの状態では、フィラルシーとまた遊んだり話したりすることは、すぐには許されないだろう。

もしかしたら、ずっと許されないのかもしれない。

> 私ね、ちゃんと考えるから<

「えっ？」

> どうしたら、フィーとまたちゃんとお話できるようになるのか、考えてみるから<

「フィラ……」

必死の異母妹の言葉に、フィリシアは目が覚めるような思いがした。

そうだ。きっと、大人にも大人の事情というものがあるのだろう。それは、子どもの自分には、わからないものなのかもしれない。でも、子どもには子どもの思いがあるのだ。

自分は、フィラルシーとこれからも、話したり、遊んだりしたいのだ。

乳母や母がダメだと言っても、それだけはあきらめきれない。

「私も、考えてみるよ、フィラ」

> それまでは、時々、こうやってお話してがまんしようね<

「うん！」

その時、フィリシアは心の底から笑うことができた。と、ふいに、

> あ、それはダメじゃ<

フィラルシーとは違う、別の『声』が聞えてきた。

「え？」

> 母上！？ <

驚いたような、フィラルシーの『声』も聞えてくる。

> 「力」に頼ってばかりでは、いい考えは浮かばぬよ<

それが、初めての出会いだった。

そう……ブライジャリ・マリと言われた、父・ガイーの公妃・オリガと。

愛妃の娘である自分との。

「フィリシア？ どうした」

パチツと、火が割れる音がした。

火の上に置いた、銀のポットからは、しゅんしゅんと、白い蒸気が出ている。

「オリガ様……」

「疲れたか？」

フィリシアの向かい側に座ったオリガが、そう聞いてくる。

その手元には、人数分のカップが用意されていた。

「いいえ」

その問いかけに、フィリシアは首を振った。

「無理はするな。ここは、南都や帝都とは気候が違う。そなたには、きついであろう？」

「いいえ、だいじょうぶです」

その言葉にも首を振った。

実際、北都に近いこの場所の寒さには、辟易していた。

だが、今はそのことにかまっている暇はないはずだ。

「そうか？……ならいいが」

「本当にだいじょうぶです、オリガ様。……ただ、昔のことを思い出していたんです」

「昔のこと？」

「はい。オリガ様や、フィラルシーと出会った時のことを」

フィリシアがそう言うと、オリガは小さく笑った。

「なんだ。なつかしいことを言うな」

白い息が、上がる。

「私はあの時、びっくりしました」

シュンシュンと、銀のポットから水蒸気が上がるのを見ながら、フィリシアは言葉を続けた。

「オリガ様は、『力』に頼ってばかりいると、それがないとダメ

「なって、どうしようもなくなるぞ」と、言われて」

「そんなことを、言ったか？」

「はい。厳しいことを言われる方だな、と思いました」

「それを言うなら、わたくしも驚いたぞ」

「え？」

「忘れたのか？ そなた、そのわたくしの言葉の後で、『ドケチッ

！』と叫んだのだぞ」

「……」

そのことについては、綺麗さっぱり忘れていたフィリシアは、沈黙を守った。

「最初は、フィラルシーが叫んだと思ったわ。そしたら、いやいや可憐なそなたが叫んだと風達に教えてもらって、びっくりしたぞ」
くくくつと笑いを抑えながら、オリガは言った。

その表情は本当に楽しそうで、フィリシアは、ひたすら沈黙を守るしかない。

「だが結局、いい方法を二人で考え出していたな」

「それは、オリガ様が言われたからですよ」

「うん？」

「『二人で一緒に考えるならば、良いぞ。ただし、^{ひとつき}一月以内な』と言われたので、二人で必死に考えたのです」

多少、言葉が恨みがましくなるのは仕方なかった。

だが、あの時は本当に大変だったのだ。しかも、オリガからのアドバイスは、一切なかった。

当時、フィリシアもフィラルシーも七歳である。

「ああ、そうだったな」

顔に笑みを浮かべたまま、オリガは頷いた。

「一つ聞きたいのですが、オリガ様」

そんなオリガに、フィリシアは尋ねた。

「あのまま、私達が良い考えが浮かばなかったら、どうしていましたか？」

「そうじゃな……。どうしたであろうか？」

そう答えたオリガの横顔に、雪が静かに舞い落ちる。

「また、降ってきたな」

その雪を見て、オリガが呟く。

空を見上げるオリガを見つめながら、フィリシアは、自分の吐く息が空に登っていくのを感じていた。

結論から言えば。

フィリシアとフィラルシーは、一緒に過ごせるようになった。

二人は、オリガが言ったように一ヶ月考え込んで、その方法を思いついたのである。

> 「文初めの儀」？<

風達が運んでくれるオリガの言葉は、いつも、どこかくぐもって聞こえた。

> ダメかな？ 母上<

フィラルシーの声は、やはり「力」を使っている本人のせいかな、はつきりと聞こえる。

> まあ……悪くはないが<

「文初めの儀」というのは、アリシア帝国で、子どもが七歳になった時に行われる儀式だ。「学びの儀」とも言われている。

騎士の家や商家、貴族の家、農家など、子どもが生まれた家によって学ぶことは違ってくるが、子どもが七歳になった時から、アリシア帝国では「学ぶ」ことを始める。

そのことを祝うのが、「文始めの儀」なのだ。

そしてそれは、南都公主家の二人の公女―フィリシアとフィラルシーも、例外ではなかった。

否。むしろ、多大な期待を持って、人々は二人の「文初めの儀」を待っていた。

この頃。人々は、口々に言っていたのだ。

「南都公主殿は、なんと幸運なお人よ。期待できる跡継ぎと、どこ

に出しても恥ずかしくない駒を、同時に持つていらつしやる」と。
言うまでもなく、「期待できる跡継ぎ」とは、フィラルシーのことだった。

女ではあったものの、公妃の娘で、二人の神から守護を受けている彼女が跡継ぎになることは、誰も文句はなかった。

そして、「駒」とはフィリシアのことだった。

「神の色」は持たなかったものの、母親に似た、愛らしい顔立ちのフィリシアは、やはり政略結婚の「駒」として、有力な存在だと考えられていたのだ。

だが、当人達は、そんな儀式があることも知らなかった。

そもそも、フィリシアとフィラルシーがこの「文始めの儀」のことを知ったのは、フィリシアの乳母の、『もうすぐ姫様の『文始めの儀』ですね。お父様に、何をお願いしますか?』という言葉からだった。

その時は、何のことかわからなかったので、『何、それ』と、フィリシアは聞いて、乳母に教えてもらったのだ。

「文始めの儀」は、全能神・ムーアが七歳になった時、学問の神・ティカルに付いて学び始めたという故事に由来する。

アリシア帝国の子どもたちは、七歳になった時、この「文始めの儀」をして、学び始めたことを祝うのだと言う。

『その時に、お祝いの品物が渡されるのです。たいていの場合、子どもたちが先に希望している物を、送られるみたいですよ』

乳母の言葉を聞いたとたん、フィリシアはそれだと思った。

その「文始めの儀」自体には何の興味も抱かなかったが、「お祝いがもらえる」ということは、しっかりと頭の中に残った。そして、すぐフィラルシーに知らせたのだ。

風達は、フィリシアがフィラルシーに「言葉」を伝えようとする
と、その「言葉」を運んでくれる。

それは、いつでも確実に、しかも素早くやってくれるので、フィリシアは内心この「力」を自由に使わせてくれないオリガのことを、

恨んでいた。

そうして、「力」を使って二人で話し合い、「文始めの儀」のお祝いに、父親のガーイに「一緒に遊ぶ」許可をもらおうと考えたのだ。

> 悪くはないが……いつ、言う気じゃ？ <

オリガは、ふむ、という感じで聞いてきた。

> え……？ <

「はい？」

そのオリガの問いに、フィリシアとフィラルシーは、とまどった。二人とも、「お願いをする」ことだけに拘っていて、何時父親にその「お願い」を言うのかまでは、考えていなかった。

> 「文始めの儀」の時に言うつもりか？ ……しかし、そなた達は、別々に行われるぞ<

> えっ？ そうなの？ <

「え、なんで？」

この時、もしオリガの表情を自分が見ることができたのなら、苦い表情を見ることができたのだろうな、と後にフィリシアは思った。何故、自分達二人の「文始めの儀」が、一緒に行われなかったのか。

その理由は、母・セーレンのせいだった。

母は、極力控え目な態度をとろうとしていた。

だから、公式の行事にもほとんど出席することはなかったし、フィリシアが公衆の面前に出ることも好まなかった。

その姿を見て、世間の人々は、

「南都公主殿の愛妃殿は、慎ましいお人よ」

と噂したらしいが、それは違うのだ。

母は、わざとそういう態度をとっていたのだ。

否、違う。

そういう女性を「慎み深く、神の化身である公妃に圧倒されてしまう、か弱い愛妃」としての自分を演じていた。

父・ガリーの気を引くために。

父の気持ち、自分から離れていかなないようにするために。
だから。

当然、娘の「文始めの儀」を、公妃の娘であるフィラルシーと一緒にすることなど、反対だった。

父が自分のことを「控え目で、弱い人よ」と、思うようにするために。

ただ、それだけのために。

>…まあ、いろいろと事情があるのだろう<

ただあの頃の自分には、そんな母の心情など、わかるはずもなかった。

だから、そう言っ言葉葉を濁したオリガに、フィリシアは、それ以上の事は尋ねなかった。 がつくりと、オリガの言葉にフィラルシーと二人で落ち込んだだけだ。

せつかくいい考えが浮かんだのにと。

>別に、「文始めの儀」の時に、お願いしなくてもいいのではないかと<

だが、そんなオリガの言葉に、フィリシアの意識はすぐ様浮上する。

>母上？<

フィラルシーの方も、何かを期待するように、母親を呼んだ。

>今から、公にお願いしに行けばいいではないかと<

オリガは、何でもないことのようにそう言った。

>父上に！？<

「今から！？」

>今なら、公は執務室にいらつしやるぞ。 行ってくればよいではないか。 フィラルシーは、執務室の場所を知っておるだろう？<

ちよつとそこまで行くようなーそんな気楽なオリガの言い方に、フィリシアは固まってしまった。

仕事中の父親のところに行くことなど、まず、考えられなかった。

この頃のフィリシアは、母親のセーレンと同じで、ほとんど自分が住む棟の館から出たことがなかったのだ。

だから。

オリガの提案は、フィリシアにとって、とんでもないものだった。だが、フィラルシーは、

>わかった。行こう、フィラ<と、言った。

「フィー……。でも……」

>父上には、怒られるかもしれないけど、私はフィラと一緒に遊びたいの。だから、お願いしてみる<

自分は父の怒りが怖くて臆しているのに、フィラルシーの言葉には、迷いがなかった。

（すごいな）

それが、フィラルシーに対して、そう思った瞬間だった。

自分のできないようなことを、風のように軽やかに、やってのける異母妹。

そのことに、不思議と嫉妬は感じなかった。

ただ、自分にはできない、と思ったただけだ。

そう。

フィラルシーの生き方は、自分には、絶対できない生き方だった。

オリガが嫁いで来た日の夜。

父は、オリガのいる寢所には行かず、母の所へと来たらしい。

嫁いで来たオリガには申し訳なかったけれど、涙が溢れ出てくるほどうれしかった、と繰り返し、母はフィリシアに言って聞かせた。そう。幾度となく。

まるで、自分に、言い聞かせるように。

温められたカップからは、白い湯気が出ていた。
東の国で作られたそれらは、熱い湯をかけられても、割れることがない。

慣れた手つきで、カップに入れた湯を捨てるオリガを見ながら、
フィリシアはカップと同じ「陶磁」と言われる物で作られたティーポットに、茶の葉を入れた。

そうして、銀のポットに入ったお湯を注ぐ。

熱くなったティーポットを、手袋をはめた手で持ち、揺らした。
こうすると、茶葉が開き、おいしいお茶が入られるのだ。

「……手際がよいな」

そんなフィリシアの姿を見て、オリガが感心したように言った。

「オリガ様が、教えてくださったのですよ。お忘れですか？」

「覚えておるとも。感心しているのだから、水を差すようなことを、言うでないよ」

フィリシアの言葉に、オリガは微苦笑を浮かべる。

『文始めの儀』が終わった後、フィリシアはフィラルシーと一緒に
なって、オリガから色んなことを教えてもらうようになった。

文字の書き方・読み方から始まり、行儀作法、他国の言葉、乗馬
や泳ぎの方法、剣の使い方まで、オリガは二人に教えたのだ。

オリガに書いて学ぶ時間はどれも楽しくて、時間が過ぎるのはあつという間だった。

十歳になり、その当時既に皇帝だったエドアールの婚約者として皇宮に上がるまで、オリガは、自分達の先生だった。

フィラルシーと一緒に、オリガから学ぶ時間は、とても楽しかった。

オリガは勉強だけではなく、二人をよく遊びにも連れて行ってくれた。

行った場所も、山だったり、海だったり、川だったり、街中だったり、色々だった。

広い館の庭の手入れもした。

お菓子作りも、館の台所を借りてやった。

母のセーレンと乳母と、静かに暮らしていた頃では、考えられない生活だった。

でもその一方で、乳母や母とは、だんだん上手くいなくなっていくたのだ。

フィリシアが作ったお菓子を、乳母や母に食べてもらいたくて持つて帰ってきてても、

「菓子作りなど料理人の仕事なのですよ！？」

と、乳母は青い表情をして言った。

母も、哀しそうな表情をしていた。

あなたは、ガーンイ公主の第一公女なのに。

そんな表情で、フィリシアを見ていた。

フィリシアは、オリガから学ぶ時間は、とても楽しかった。

お菓子作りも、庭の手入れも、オリガやフィラルシーだけではなく、侍女や料理人を巻き込んで、皆で一緒になって楽しくやっていたのだ。

『とても上手にできていますね』

『おいしくできましたね』

そして出来た後は、皆で一緒にお茶やお菓子を食べたりして、と

ても楽しい時間を過ごしていた。

だから、そんな時間を、母や乳母達とも過ごしたかったただけなのだ。

だが、母や乳母は、そんなフィリシアの気持ちを知らず、「フィリシア（あなた）は、ガイー公の第一公女なのに」

そんな言葉で、フィリシアが学んできたことを否定し、非難した。結局、持って帰ったお菓子は食べてもらえず、次の日、オリガやフィラルシーと一緒に、お茶の時間に食べた。

お菓子を食べながら泣くフィリシアの頭を撫でながら、「すまなかつたな」

と、オリガは小さく呟いた。

後になって思えば、母も乳母も、嫉妬をしていたのだろう。

オリガに勉強を教えてもらって、楽しそうにしているフィリシアを見て、おもしろくなかったのだ。

そう……彼らの「敵」である、公妃・オリガに。

乳母にとっては、自分が育てた「息子」を奪っていく者として。

そして、母にとっては、「愛する者」を奪っていく者として。

確かに、オリガは「敵」だったのだ。

父が、オリガのことを愛している、とフィリシアが気付いたのは、十歳の時だった。

あの頃。

フィリシアには、皇帝であるエドアール二世との縁談が持ち上がっていた。

皇帝の娘を公妃にした父は、今度は我が娘を皇帝の皇妃にすることで、自分の影響力を大きくしようとしたのかもしれない。

いや―実際、父はそれが狙いだったのだ。

だが、他の公主家にもそれぞれに思惑や野望もあっただろうし、皇宮の政治勢力も、立て続けに同じ公主家と婚姻を続けるのは、良しとはしなかったはずである。

しかし結局、フィリシアはエドアールの皇妃となった。

その理由の一つは、オリガと父の間には、フィラルシーが生まれていなかったことがある。

黒髪に紫の瞳を持つフィラルシーは、まれに見る、神の加護を受けた子どもだった。

歴史を振り返って見ても、二色の「神の色」を持つ者はいない。

そして、フィリシアとエドアールは、そのフィラルシーと同じ血筋を持っているのだ。

あわよくば―と、皇宮の者達は、フィラルシーと同じ存在の誕生を期待したのである。

そうして。

もう一つ、皇宮の者達が狙っていることがあった。

実はフィラルシーも、フィリシアと同じ時に、皇宮に上がったのだ。

皇帝エドアール二世の、養女として。

そう―父はフィリシアをエドアールの皇妃にする代償として、自慢だった後継者^{フィラルシー}を失ったのだ。

だけど父は、そのことを直前まで知らなかったらしい。

学習室となっていた部屋で、フィリシアに勉強を教えていたオリガを尋ねてきた時、父は怒りの形相だった。

「公……」

だが、テーブルに向かい合い、フィリシアに外国語の発音を教えていたオリガは、ノックもなしに部屋の中に入ってきた父に、あまり驚いた様子はなかった。

もしかしたら、父が来ることを、ある程度予想していたのかもしれない。

父は、開け放したドアを、ドンツと強く叩いた。

「どういうことだ!？」

その父の乱暴な態度に、フィリシアは声も出なかった。

「公」

ふわりと長い髪を揺らし、オリガは椅子から立ち上がった。

そうして、さきほどまでフィリシアに見せていた表情とは全く違う、落ち着いた―でも、とても冷たい、とも思える瞳で自分の夫を見ていた。

「何故、フィラルシーが皇宮に上がらなければ、ならぬのだ!？」

「それは、使いの者からお聞きした通りです」

声を荒げる父に対して、オリガの態度は冷静だった。

「フィラルシーは、私の子だぞ!? この、南都公主家の跡継ぎだつ」

「それは、重々承知しております。しかし、皇宮の者達は、あの子がこの南都公主家の跡継ぎになることは、望んでおりませぬ」

ドンツと、再び父は扉を叩いた。

それに、びくつと、フィリシアは、首をすくめた。

「公……。子がおります。この子を部屋に帰してからでは、なりませぬか」

「誤魔化すなっ!」

オリガは一步、父の前に出た。そうすることで、フィリシアには父の姿が見えなくなる。

「公。わたくしは、お聞きしませんでしたか? 『どのようなことがあっても、エドールとの婚姻を望むのですか?』と」

そして、とても落ち着いた声で言った。

父の乱暴な態度にも、全然臆した様子はない。

「なにつ」

「その時、公は『何を置いても、婚姻を成立させる』と言われまして」

「……っ」

「ゆえに、家臣達もそのように動きました。公に口添えを命じられた(……)わたくしも、公の願いを叶えるために、そうしたのです。そして皇宮の者達は、その代償にあの子を望んだのです」

オリガの言葉に、フィリシアは目を見張った。

「何ゆえなのだっ……」

「……あなたは、望みすぎたのですよ、公」
静かな声で、オリガは言った。

「一つの所に恵まれたものが集まるのは、好ましくないと誰もが考
えるのです。ましてあの場所にいる者達は、一番恵まれていなか
ればならぬのは自分達だと考えているのです」

「……フィラルシーは、そなたの娘だぞ!? 何故そのように落ち
着いた態度でいるのだっ」

「それが、フィラルシーにとっては、一番いいだろう、と思うから
です」

バンツと、乱暴にドアが閉められた。

父が、開いていたドアを、叩きつけるように閉めたのだ。

「ならば、この南都公家はどうなる？」

「……それは……公も、セーレン殿もまだお若いのです。これから
先――」

ばしつと、父はオリガの手首を握り締めた。

「公!？」

「そなたは、私の子はもういらぬと申すのか」

オリガの背に遮られ、父の表情が見えなかったフィリシアにも、
父の声に潜む暗い感情にはつととなった。

「もう私の子は生まぬ、と申すか」

今までそんな父の声を、フィリシアは聞いたことがなかった。
「公？」

だが、オリガには、父のそんな思いがわからないようだった。
けげんそうな声で、父を呼んだ。ガチャンと大きな音を立て、テ
ーブルが動いた。

「なっ……」

「オリガ様っ」

父が、テーブルの上に、オリガを押し倒したのだ。

「そなたには、私の子を生んでもらう。何がなんでもなっ……」

「止めてください、父様！」

そう、フィリシアが叫んだ時だった。

「……フィー……」

一筋の風が、フィリシアの目の前を通り過ぎた。

そして、はっと我に返った時。

そこは、さっきまでいた部屋ではなかった。

「フィラ……」

呆然としたフィリシアを気遣うように、フィラルシーが、声をかけてくる。

「だいじょうぶ？ フィー」

そこはフィラルシーの部屋だった。フィリシアは、フィラルシーと共に過ごすようになってから、よくこの部屋には遊びに来ていた。
「うん……」

少し眩暈がしたが、フィリシアは頷いた。

「これもフィラの「力」なの？」

そうして、床に座り込みながら聞いた。

「……。母上には、絶対使うな、って言われているけどね」

歩かずに、移動できる「力」。

どこまで移動できるかはフィリシアにはわからない。

けれど、オリガが、その便利な「力」を多用しないように、フィラルシーに常々言っているのは、知っていた。

「使って良かったの？」

「……うん。母上が、そうしろって」

「オリガ様が？」

「父上が、なんかすごく怒っているからって、風達を使って、『言葉』を届けてくれたの」

「そっか……」

フィリシアは、深くため息を吐いた。

「……父上、そんなに怒っていたの？」

「うん……。とても、こわかった」

今まで、あんなに怒る父を、見たことがなかった。

残されたオリガがどうなったかも、気になった。

「オリガ様がどうなっているか、わからない？ フィラ」

「わからないの。まるで、幕が張ったみたいで、何も見えない」

フィラルシーも気にかかるようで、「力」を使って、様子を見ようとしているのだが、できないようだった。

「フィラは知っていたの？ 自分が、皇宮に上がることに」

「うん……昨日、母上に聞いた」

「いいの？……それで」

「フィーは？ 叔父上と結婚することになるよ？ 本当にいいの？」

だが、逆にフィラルシーにそう聞かれ、返事に詰まった。

「……わかんない」

正直、それがフィリシアの本心^{こたえ}だった。

結婚する、ということ。

そして、夫となる皇帝エドアール二世のこと。

父に、『お前の婚約が決まったぞ』と言われた時から、それが現実になるものだと、感じられないのだ。

ただー相手のエドアールは、オリガの弟だった。

あの、誇り高く、優しい女性^{ひと}の。

「ただ、全然知らない人のところに行くよりはいいかなって、思った」

フィリシアはエドアールに会ったことはないが、エドアールの姉である、オリガのことは知っている。

誰一人知らない人がいるところに嫁ぐよりは、遥かにましだと思っていた。

「私もそうだよ、フィー」

「フィラ」

「私も、どうして皇宮に上がるのかわからないの。でも、フィーと一緒にならだいじょうぶかな、って思った」

紫の瞳が、フィリシアを見て、にっこりと笑った。

この瞳が自分を見つめてくれていたら、だいじょうぶだと思った。

二人であれば、だいじょうぶだと。

「そうだな。そなた達二人が、共にあれば、だいじょうぶであろう」
その時、ふいにそんな声が聞こえてきた。

「母上！」

部屋のドアが開きオリガが入ってきたのだ。

「……そなた達は、何を床にすわりこんでおるのじゃ」

慌てて立ち上がった二人を見て、あきれたようにオリガが言う。

「だいじょうぶだったのですか、オリガ様」

だがそれにはかまわず、フィリシアはオリガに駆け寄りながら聞いた。

「何を心配しておるのじゃ。だいじょうぶに、決まっておるうが」

それに微笑みながら、オリガは答えた。

「母上……」

フィラルシーの方も、氣遣うように、母親に声をかける。

「何も心配することはない。それよりも、そなた達は、明日からそれぞれに特訓せねばならぬぞ」

「母上？」

「特訓？」

オリガの言葉に、フィリシアもフィラルシーも、きよとなる。
そんな二人を見て、オリガはにっこりと笑った。

と、その時だった。

「オリガっ。まだか！」

いらついたような声がして、父が戸を開け放して入ってきた。
「公……」

とたんに、オリガの表情が冷たいものとなる。

父は、そのオリガの表情を見て、さらに険しい顔になった。

「何をしている。まだ、そなたの役目は終わっておらぬぞ……！」

「今から参ります。今少し、お待ちください」

父にそう言うと、オリガは、フィリシアとフィラルシーに向き直った。

「また明日、その話はくわしくしよう。フィリシア殿、あまり遅くならぬうちに、あちらに戻るのじゃぞ」

「はい」

二人は、同時にそう返事をした。

その時ふいに、強い視線を、フィリシアは感じた。

（えっ？）

視線を感じる方を見ると、そこには、父がいた。

父のはしばみ色の瞳には、暗い感情が宿っていた。

「行くぞ、オリガ」

そして、その父の暗い瞳は、真っ直ぐに、オリガを見ていた。

「わかりました」

促され、オリガは、父の後を追うように部屋を出て行く。

父の瞳に宿っていた感情。

最初、それが何かはわからなかった。

だが、フィラルシーと一緒に遊んだ後、母と乳母と暮らす棟に戻った時に。

気付いたのだ。

母の瞳にも、同じ感情が宿っていたことに。

それは、乳母が、今日は父が来ないと告げた時だった。

母は、「そうですか」としか、言わなかったけれど。

それが『嫉妬』という名の感情だということを知ったのは、ずっと後のことだった。

この一年後。オリガは、子を産む。

後の南都公主・シユリである。

ガイー公の唯一の男子であり、母と同じ、黒い瞳と黒髪を持つ子であった――。

雪が、舞っていた。

まるで、花のように。

従者達にお茶を配っていたフィリシアは、その冷たさに、目を細めた。

先程よりも、風の勢いが強くなっているような気がする。

「……まずいな」

お茶を入れていたオリガも、強くなってくる風に目を細めた。

「オリガ様」

「イスファン！」

オリガは、持っていた銀製のポットをフィリシアに手渡すと、背の高い、浅黒い肌をした男に声をかけた。

「オリガ様」

声をかけられた男は、カップを雪の上に置き、立ち上がった。

「行き先を変更するぞ。この近くを治めているのは、マズルカ伯爵だったな。そちらの所領に向かう」

「オリガ様っ」

その言葉に、イスファンと呼ばれた男は、顔色を変えた。

同様に、御者や護衛の兵達も、はっとなってオリガを見る。

「あの子のいるリースは、この北都でも、一番北の地域じゃ。ここからでは、後一昼夜かかる。だがそれは、今の天候ではできぬ」

「オリガ様、でも！」

フィラルシーは、今日明日も知らない身なのだ。

このまま、会えないで逝かせることになるかもしれないのだ。

「人が死ぬ」

だが、言葉を続けようとするフィリシアを遮るように、オリガは言った。

「それは、避けなければならぬ」

「オリガ様……」

「急ぐぞ、イスファン。馬車は置いていく。馬だけ連れて行くぞ」

「よろしいのですか？ オリガ様」

問うように、イスファンが言う。

「……死者を出してまでリースに行つて、あの子が喜ぶと思うか？」

その問いに、オリガは静かに答えた。

「……」

オリガの言葉に、そこにいる全員が黙り込む。

それは、フィリシアも同じだった。

フィラルシーの人柄を知る者は皆、オリガの言葉が真実であることが、わかるのだ。

「わかりました、オリガ様」

イスファンはこくりと頷くと、周りの者達に指示を出していく。

慌しくなる空気の中、オリガは雪の上に置かれたカップを集め始めた。

決して、冷たい人ではない。

むしろ、全てのものに愛情を注ぐ女性だ。

それは、フィリシアもよく知っていた。

実の子ではない自分にですら、真っ直ぐな愛情を向けてくれたのだ。

それどころか、実の親以上に、自分が苦しい時に、助けてくれた。そう――自分が一番苦しかった時も。支えてくれたのは母ではなく、オリガだった。

十歳で、フィリシアはフィラルシーと共に皇宮に上がった。

それはもちろん、自分達が望んだことではなかった。

周りの大人達の思惑と――そうせざる得ない事実があったからだ。

それでも、二人にとって皇宮に上がったことは、悪いことではなかった。

確かに皇宮の大人達は、南都公主に「恵み」が集中することを

嫌ったが、自分達が手に入れたら、満足したらしい。

決して、悪い扱いはうけなかった。

フィリシアとフィラルシーの世話をしてくれたのは、昔、オリガに使えていた侍女達だった。

二人の部屋は隣同士に与えられ、南都公主家の館にいる時よりも、頻繁に互いに行き来することができた。

またフィリシアとフィラルシーは、それぞれ別々に教師が付き、学び始めた。

フィリシアは将来の皇妃として、アリシア帝国の歴史や社会の仕組み、礼儀作法や他の国の言葉を学んだ。

一方フィラルシーは、剣術や馬術、それから「力」の使い方を学び始めた。

実は、皇宮には「ガレリーナ」と呼ばれる、兵士を養成する機関があつたのだ。

「ガレリーナ」は、一般の兵士とは違い、魔物退治を専門とする。そして彼らは、皇帝直属の兵士でもあつたのだ。

戦闘神・アルロの守護を受ける者として、フィラルシーは、この「ガレリーナ」の素質が十分だと考えられたのだ。

オリガが言っていた、『それが、フィラルシーにとっては、一番いいだろうと思うからです』とは、このことだったのだ。

実際、フィラルシー程ではなかったが、その機関には、「ガレリーナ」候補生として、国中の「力」のある者達が集まってきていた。

その中に、彼らはいたのだ。

彼らは、北都公主家の家臣で、北のリースを守る、リース伯爵の双子の息子達だった。

太陽のような明るい金髪と緑の瞳を持つ、エステファンと。

月の光のような美しい銀髪と青い瞳を持つ、アスティンと。

リース伯爵家は、代々北都の中でも一番北の地方を守っていたが、そこは頻繁に魔物達が出現する地域でもあつた。

だから、リース伯爵家の人間は何かしらの「力」を持ち、ガレリーナになるために、「文始めの儀」が終わったら、皇宮に上がっていたのだ。

最初こそ、フィラルシーは戸惑っていたようだが、やがて訓練や日常の生活を通して、だんだんと、仲間として他のガレリーナ候補生達と馴染んでいった。

フィリシアの方も、よくフィラルシーに差し入れを作り持って行ったりしていたので、自然と彼らと仲良くなっていった。

「公主家の公女様が、お菓子を作るなんてなあ」

そんな軽口を叩いていたのは、エステファンだった。

「とてもおいしいです。ありがとうございます、フィリシア様」

アステインは、いつもそうやって、お礼を言ってくれた。他の候補生達も、

「うっん。フィラルシーのお姉さんが、こんなに料理が上手な人とは思わなかった」

「いいな、綺麗で優しいお姉さんがいて」

そんなことを、言ってくれた。

でも、彼らは皆、どちらかと言えば、フィリシアの作ったお菓子が、目的だったような気がする。

「私の分がないよ、フィー」

そんななさけなさそうな声で、フィラルシーが言う時もあった。楽しかった。

そう……。母や乳母と静かに暮らし、父が訪れるのを待つ、あの頃の暮らしより、はるかに。

この頃は、フィラルシーや、ガレリーナ候補生達、優しい侍女達に囲まれて、本当にフィリシアは楽しく毎日を過ごしていた。

年に一・二度、オリガが幼いシユリを抱いて、皇宮に上がってきて、その時は四人で一緒に過ごした。

不思議だった。

血の繋がった父や母と共にいるよりも、楽しく過ごせることが。

そして、父や母に会うよりも、オリガに会えることの方がうれしかった。

折に触れ、オリガは父や母のことをフィリシアに知らせてくれたが、

「そうですか」

と頷き、決して父や母に会いたいとは言わなかった。

会いたい、とも思わなかったのだ。

エドアールとの婚約が決まったとたん、さらに距離を持って、自分に接するようになった母と。

あまり、接する機会がなかった父と。

どうして、会いたいと思えるだろうか？

この頃には、実の父母とは言え、フィリシアにとっては、どちらも遠い存在になってしまっていた。

それだけ、フィラルシーやオリガが、「家族」として、フィリシアのことを、十分に愛してくれたのだ。

そんな楽しい日々の中でも、唯一、懸念することはあった。

将来の夫でもある、エドアールだ。

当時彼は十七歳。

だが、初めて引き合わされた日から、エドアールの態度は冷たかった。

『あなたが、悪い人だった良かったのに。そうすれば、私はあなたを憎めたのに』

泣きながら、そう言った男^{ひと}。

その男の肩を、優しく抱いていた、夫。

憎むことができたのなら、ずっと、楽だったのかもしれない。

そう……お互いに。

「フィリシア？」

オリガに声をかけられ、はっとなった。

「寒いのか？」

気遣わしげに、オリガは聞いてくる。

どんなに気遣われても、寒いものは寒い。

だが、耐えられないものではなかった。

「私はだいじょうぶです、オリガ様。それよりも、オリガ様こそ、ご無理をなさらないでください」

そう言っ、フィリシアはオリガが持っているカップを、受け取った。

「フィリシア？」

「お子がいらっしゃるのでしょう？」

フィリシアの言葉に、オリガは、はつとなった。

その表情を見て、フィリシアは自分が感じていたことが、正しかったと思っ。た。

「……オリガ様は、何時気づかれましたか？ 父上が、ご自分のことを愛していることを」

「フィリシア……」

「父上は、ずっと以前から、オリガ様のことを愛しておられました」
五年前に、フィリシアの母・セーレンが亡くなった。

そしてその翌年、南都公主第三公女・セルバが誕生している。

フィリシアやフィラルシーとは、二十歳も離れた妹だった。

そして今、オリガのお腹の中には、新しい命がまた宿っている。
シュリが生まれた頃。

オリガは、父が自分のことを愛しているとは、気付いていなかった。

だが、もしオリガがそのことに気付いていなければ、セルバは生まれてないし、新しい命が宿ることもなかっただろう。

「それを知っ、どうする？ フィリシア」

静かな声で、オリガは問うた。

「わかりません……でも、知りたいのです」

風が吹き、小さい雪がまとまって風に舞う。

「そなたの母が……セーレン殿が、亡くなった時だ」

その舞う雪を見ながら、オリガは言った。

「その前に離縁を申し出た。それを、強固に反対されてな……」

フィラルシーが皇宮に上がることになった時の、父の様子を、フィラルシーは思い出した。

あの時と同じようなことを、父はしたのかもしれない。

父がフィラルシーを皇宮に上げたくなかったのは、何も、「二つの神の色」を持っていくからではなかった。

オリガの――愛する女ひととの間にできた子、だったからだ。

だからこそ、手元に置きたかったのだ。

そして、オリガに次の子を産むように望んだのも、そのせいだった。

だが、オリガはそのことに気付かず、離縁を申し出た。

死にゆく、母のために。母の願いを、叶えようとしてくれたのだらう。

「その時、オリガ様はどう思われました？」

「正直、最初はあまりうれしくなかった。自分の努力が、全て否定された気がしての」

「えっ……」

オリガの言葉に、フィリシアは大きく目を見開いた。

「わたくしの望みは、そなたの父と、別れることだった。

そのために、自分の役目を必死に果たしてきたのだ。自分の役目が終わるまでは、とな」

そんなフィリシアに、オリガは微笑みながら言った。

「シユリが『成人の儀』を迎える十五になったならば、自分から申し出るつもりでいた。結局……間に合わなかったが」

一瞬、病床で、父の手をしっかりと握っている母の姿が浮かんだ。最後の最後まで、母は父から離れることを望まなかった。

「オリガ様、準備ができました」

ちやうどその時、雪を踏み鳴らしながら、セルゲイが近づいてき

た。

「行こうか、フィリシア」

「……オリガ様」

「今は、フィラルシーが待っている。供の者達を安全な場所に届け
たら、わたくしとそなた、二人で向かおう」

黒い瞳が、真っ直ぐにフィリシアを見て言った。

「一緒に行こう」

そう言って、差し出してくれる手があった。

でも、その手に、自分は首を振った。

わかっていたからだ。

もう、あの頃のように、お互いが一番ではないことを。

自分以外の大切な人が、その手の持ち主に、できたてしまったこ
とを。

フィリシアが十六歳になった時に、アリシア大陸全土を揺るがす、
大きな事件が起きた。

魔物達が、大発生したのだ。

それまでは、年に何度しか発生していなかったものが、大量に、
それも同じ日に発生するようになったのだ。人も、たくさん死んだ。

「ガレリーナ」候補生だった彼らも、その頃には、正式なガレリ
ーナとなり、毎日のように出兵して行った。

「行ってきます、フィリシア様」

笑顔でそう言って出兵し、二度と帰ってこない者もいた。

幾度、フィリシアも、フィラルシーも泣いたかわからない。

それでも悲しみに負けずに、フィラルシーはガレリーナとして、
毎日出兵していた。

実際、風の精霊達を中心として、火、水、土、全ての精霊を操る

ファイラルシーの「力」は、魔物に対しても大きな戦力だった。

また、黒髪・黒い瞳を持つオリガは、魔物達の退治方法を誰よりも知っていた。

水と平和の神・ユスの守護を受けていたオリガは、常人では考えられないほどの知識を持っていたのだ。

その母と同じ黒髪・黒い瞳を持つシユリは、何時・何処に魔物が現れることがわかる「力」を持っていて、魔物撲滅のためにやはり大きな役目を果たしてくれた。

光を操る「力」を持つエステファンと、影を操る「力」を持つアステインも、そうだった。仲間を失い、挫けそうになった時もあつただろうに、彼らも決して戦うことを止めはしなかった。

そんな中で、ファイリシアは、自分に力がないことに、正直苛立つ時もあった。

自分だけが、何もできないような気がして。

だが、そんな時に、オリガは言ったのだ。

「そなたの、できることをすればよい」と。

無理をしても、彼らの足手まといになることはわかっていた。

だから、ファイリシアは、オリガの言葉通りに、自分のできることを一生懸命やった。

ケガ人の手当てや、出兵時の携帯用の食事の準備、留守の間の部屋の掃除など、侍女達と一緒に何でもやった。

「将来の皇妃がそのようなこと」などと言う人もいたが、「そのようなことは、関係ありません」と、答えた。

誰もが一生懸命国を守るために働いているのに、自分だけ、のうのうとしておけなかった。自分のやれることは、全てやりたかった。

魔物との戦いは、一年間続いた。

決着は、あっけなく着いたとは、もちろん言えなかった。

だが、最後に大元になった魔物を倒した時、ファイラルシーは泣いたと言う。

何故そうなったのか、戦いに行っていないフィリシアにはわからない。

けれど、「ただいま」と言って、帰ってきたフィラルシーを見た時、その姿から深く傷ついているのがわかった。

「おかえり」

だから、そう言つて、傷ついた異母妹いもを抱うきしめた時、これ以上彼女には傷ついて欲しくない、とフィリシアは思った。

実際、たくさんの者を失い、フィラルシーは傷ついていたのだ。

そう…心も、体も。

国中を上げて復興に立ち向かう中、フィリシアとエドアールの婚姻も、慌しく進むようになった。

家臣達は、二人の婚姻を、復興の象徴にしようと思ったようだった。

だがこの頃には、フィリシアは知っていた。

夫となるエドアールには、既に恋人がいることを。

そして、その恋人とは、アステインであることを。

「あなたが、悪い人だった良かったのに。そうすれば、私は、あなたを憎めたのに」

そう言つて泣くアステインに、かける言葉などなかった。

その泣く彼の肩を、自分の夫となる男ひとは、愛しげに抱いていた。

……夢を、見るつもりはなかった。

母・セーレンの立場からも、わかることだった。

公主家や皇家のような家柄では、結婚はまず、家の立場が先に来る。

当人同士の感情など、ほとんど考慮されることはない。

だから大抵の当主には、「側室」や「愛妃」と呼ばれる、女性たちが存在する。

かつてのオリガも、フィリシアと同じ条件で、南都公主家に嫁いで来たのだ。

ただ、父は、オリガに接するようになってから、どんどん魅かれ

ていき、彼女を愛するようになっていた。

オリガ自身は、気付いていなかったけれど。

自分を愛さない人と結婚するという事実が、とてもむなしかった。
だから。

「一緒に行こう」

とフィラルシーが言った時、本当はうれしかった。

戦いが終わった後、フィラルシーはエステファンと婚約していた。
随分前から、二人は恋仲だったのだ。

仮にも皇帝の養女がーという意見もあったようだが、それはエド
アールが黙らせた。

また魔物が発生しやすいリースに、フィラルシーを行かせること
が、どれだけ国のためになるのかーそれも、婚約が許された理由の
一つとなった。

そして、皇宮で婚姻の儀式をした後、二人はリースに向かうこと
になったのだ。

そんな準備の最中、フィリシアは、フィラルシーに誘われたのだ。
「一緒に、リースに行こう」と。

その後どうなるかは考えなくていいから、とも言ってくれた。
もしかしたら、フィリシアのために、何らかの「力」を使うつも
りでいたのかもしれない。だが、フィリシアは首を振った。

たとえフィラルシーの「力」を使って、皇宮の家臣達やエドアー
ルをやり過ごしても、結局は同じなのだ。

四つある公家のどれかが、また娘をエドアールの皇妃として、
嫁がせようとするだろう。

それにより、せっかく収まった国に、また混乱が起きるかもしれ
ない。

その時、強大な「力」を持つフィラルシーは、また戦い、傷つく
羽目になるのだ。

フィリシアはもうこれ以上、戦って傷つくフィラルシーを見たく
はなかった。

それに、首を振ったもう一つの理由は、もうフィラルシーの傍には、エステファンがいたからだ。もし共にリースに行っても、今度は二人きりではないのだ。

フィラルシーにとって、一番大切な存在はエステファンであり、自分ではない。

子どもが生まれれば、もっとフィリシアとの距離はできるだろう。もう、二人とも子どもではなかった。

だけど、一緒に行けないことを、哀しいと思ったことも本当だった。

「幸せになつてね」

そして、そう願ったことも。

たくさん傷ついたフィラルシーには、幸せになつて欲しかった。そう――自分の分まで。

外は、吹雪となっていた。

雪がすごい勢いで、頬に当たってくる。

「だいじょうぶですか？ オリガ様」

羊の毛を編んだ長い丈の上着を着込み、頭には、やはり羊の毛で編まれた長い布を巻いたフィリシアは、自分の前を歩くオリガに声をかけた。

「だいじょうぶじゃ」

辺りはもう薄暗く、体を感じる寒さはフィリシアが今まで体験したことがないものだった。息は白く空へと上がり、ところどころ、フィリシアの前髪を濡らしていく。

あまりの寒さに、息が氷となってしまふのだ。

「ここならば、だいじょうぶであろう」

やはりお腹の子を気遣ってか、ざくざくと革の靴をゆつくりと雪の上に置きながら歩いていたオリガは、やがて、館の裏庭と思しき場所で、立ち止まった。

マズルカ伯爵の館に入った後、オリガは供人達に、体を温めてゆつくりと休むように命じた。

正直、フィリシアはいきなり館に訪ねて、怪しまれるのではないかと思ったが、そんな心配はしなくてよかった。

黒髪・黒い瞳を持つのは、南都公主公妃・オリガとその息子・シユリだけなのは、帝国中の誰もが知っていることだった。

だが、門番の兵士から知らせを聞いて、自分達を迎えてくれたマズルカ伯爵には、あまり恐縮したような雰囲気はなかった。

聞けば、オリガと同じ年の彼は、実はオリガの昔なじみでもあったらしい。

「後のことは、マズルカ伯にお任せしよう」

そして、フィリシアにはそう言って、オリガはフィリシアに手招

きをした。

そのまま館に入った時よりも、さらに重装備な姿になり、館の外へと出たのだ。

しかし、フィリシアは、オリガが何をするつもりなのか、聞かされてはいなかった。

「オリガ様、何をなされるのですか？」

斜めに当たってくる雪に目を細めながら、フィリシアは聞いた。

「フィラルシーのもとに行くのであろう？」

「オリガ様？」

ふわりと、オリガの黒髪が風になびき、揺れた。

「我が弟よ―ここに、参られよ」

言葉にしたら、ほんの少しの間だった。

一瞬、フィリシアは自分の夫・エドアールを呼んだのでは、と思った。

事実、オリガには、兄弟は現皇帝のエドアール二世しかない。だが次の瞬間、たくさんの雪が、竜巻状にぐるぐると自分達の周りを回り始める。

「オ、オリガ様っ」

思わず、目の前にいるオリガの名を呼ぶ。

「あまり、驚かせてくれるな。連れがおる」

しかし、オリガはフィリシアの方は見ずに顔を上げ、空中にいる何か（・）に（・）話しかけている。

えっと、フィリシアが思った瞬間だった。

ざわりっと、今までの吹雪が嘘のように、一瞬にして雪が消え去った。

『久しいですな、姉上。そのお姿になってからは、初めてですか』それは、とても不思議な風景だった。

空一面に、大きな男の顔があった。肩まである紫色の髪に、紫の瞳。

精悍な顔立ちをした、見かけは、まだ二十代前半の男のものだった。

た。

『その姿になられてから、一度として我らをお呼びになられなかったというのに、めずらしいですな』

「頼みがある、アルロ」

その男にむかつて、オリガはそう言った。

アルロ、という名。

そして紫の髪と紫の瞳。

（戦闘神・アルロ！？）

信じられない思いで、フィリシアは男を見つめた。

『我が眷属の、娘のことですか？』

「今はわたくしの娘だ」

『姉上も、わかっていらつしやるはずです。あの娘は、夫と共に己が役目を果たしました。その役目を果たした今、我らが世界に戻るのが道理と言うもの』

その間に、オリガと戦闘神は話を続ける。

『まして、死に逝くものを引き止めることは、我らにも許されておりませぬ』

「そのようなことを、望んでおるのではない。ただ、最後の別れをしたいのじゃ。……この娘のために」

オリガの言葉に、戦闘神は、オリガの隣に立つフィリシアに気付いたようだった。

『その娘は人ですね……。我々とは、何の関係もないようですが？』

「この子は、フィラルシーを誰よりも深く愛してくれた者。そして、わたくしを支えてくれた者。十分に、関わりがある」

けげんそうな戦闘神に、オリガは言った。

その言葉に、フィリシアは、はっとなる。

『姉上は、情が深いお方だ。必要のないお子を次々と作られたのも、そのせいですか』

「御託はいい。今は、時間が惜しい」

どこか挑発するような戦闘神の言葉に、オリガはきっぱりと言い

切った。

『……わかりました』

戦闘神は、切なそうな表情を一瞬だけ見せる。

『「道」を、お作りしましょう。「運ぶ」ことも可能ですが、それは、お腹の子には障りとなるでしょうからな』

そして、あきらめたようにそう言った。

「すまぬな、アルロ」

戦闘神の表情を、オリガは見逃さなかったのだろう。

少し哀しそうな表情をして謝った。

『いえ……ただ、姉上。御自分の役目をお忘れなきように。そして「道」で、そちらの人間の子が、迷うことのないように、お気を付けください』

「……重々承知の上じゃ。あまり心配するな」

『お目にかかれて、うれしゅうございました、姉上。また、その姿の内にお会いしたいものですな』

そう言って、微かに笑うと、戦闘神の姿は掻き消えた。

「行こうか」

そしてそれを見送ると、オリガはフィリシアに向き直り、手を差し伸べてきた。

「……オリガ様は、いったい何者なのですか」

だが、フィリシアはその手を取らず、そうオリガに聞いた。

黒髪に、黒い瞳を持つ者は、水と平和の神・ユスの加護を受けた者だと言われている。

しかしあの戦闘神は、オリガのことを、「姉上」と呼んでいた。

そう。オリガ（・・・）自身（・・・）を（・・・）。

「わたくしは、わたくしじゃ。フィリシア」

フィリシアの問いに、オリガはそう答えた。

「そなたが知っているわたくしが、そのままのわたくしじゃ。ただ、生まれる前の記憶が、残っているだけのこと」

「オリガ様……」

「少なくとも、わたくしはそのつもりじゃ。わたくしは、南都公主の公妃となり、苦しい時は、そなたやフィラルシーにいつも救われておった。その事実には、何の変わりもない」

そう言うオリガの表情は、優しいものだった。

それは、初めて会ったあの日と同じ笑顔だった。

「行こうか。フィラルシーが、待っておる」

「はい」

オリガの言葉に頷き、フィリシアは、今度は差し出された手を握り締めた。

砂を噛むー夫・エドアールとの生活は、そんな言葉が相応しかった。

覚悟はしていた。結局は、自分を愛していない男と結婚するのだ。物語や、周りの侍女達の話の通りにいくはずがない。だが、思った以上にそれは虚しいものだった。

婚約をしていた時から、ほとんどエドアールと一緒に過ごす時間は無かった。

それは、結婚してからも続いた。

だが、婚約していた時は、それでも良かったのだ。

フィラルシーが傍にいてくれたし、ガレリーナ候補生達との交流もあった。

しかしフィラルシーは、自身の結婚式の後、愛する者と共にリースへと旅立った。

また結婚をし、「皇妃」となったフィリシアは、気軽に、今や立派なガレリーナになった彼らと会うことはできなくなった。

唯一の救いは、前と同じように時々訪れてくれるオリガの存在だったが、「皇妃」となったフィリシアが、特定の公主家の公妃と親しくすることは望ましいことではない、とされていた。

気が、狂いそうだった。

自分を愛していない夫との生活。親しい人々とは遠ざけられ、「

皇妃」としての行動は、求められる。どうしろと言うのだと、幾度となく叫びたかった。

欲しいものは与えられず、でも「皇妃」としての行動を、周りは自分に求めるのだ。

その最もたるものが、「子ども」だった。

そう……次なるアリシア帝国を受け継ぐ後継者を、当然のように、彼らはフィリシアに望んだ。結婚したばかりの頃は、エドアールもフィリシアを抱きはしなかった。

しかし、結婚をして……一年も経てば、やはり、そうもやってはいられなくなったのだ。

早く子どもを、と。

国民も、家臣達も、公主家の者達も、皆、口を揃えて言った。愛してくれない男に抱かれ、その男の子を生む。

そのことが、どれほどむなしく、つらいことなのか。

多分、その立場になった者でしか、わからないだろう。

「姉上は、耐えられた」

夫は、そう言って、無機的にフィリシアを抱いた。

占いで出された日に、無機的に抱かれ、そして、その月に月ものが始まれば、また占いをする。義務だと、役目だと。

何度となく周りから言われ、自分にもそう言い聞かせた。

「だいじょうぶか？」

年に数回、会う度に聞いてくるオリガにも、

「だいじょうぶです」

と、笑顔で言った。

オリガは、自分と同じ経験をしているのだ。

そして、夫の言うとおり、そのことに耐えて、二人の子を生んでいる。

確かに父はオリガを愛していたが、オリガ自身はそのことを知らないのだ。

耐えていかなば、と思った。オリガと同じように。

だが、何時まで耐え続けなければならないのか。

そんな疑問が浮かぶようになった頃、お腹に子が宿った。

当然、周りは喜びに沸いた。

夫も、その知らせを聞いて、ほっとした表情になっていた。

だが、自分の周りが浮かれ騒ぐのを見る度に、フィリシアは自分の気持ちが冷えていくのを感じた。

周りは、当然のようにお腹に宿った子を、男の子だと思っているでも、それが女の子だったらどうなるのか。

フィラルシーのように「神の色」を持っていたらまた話は別だろうが、その可能性が低いことは、フィリシアにはわかっていた。

絶望し、当然のように、またフィリシアに子を産むことを望むだろう。

ぞっとした。また、あの心のない交わりをする、と考えただけでそれが、「皇妃」という立場で強要されると言うならば、もう全てを放りだしたかった。

そんな時、母の容態が急変した知らせが、皇宮に届いたのだ。

二・三年前から母・セーレンの体調は不安定で、床に着くことも多くなっていたことは、オリガから教えられていて、フィリシアも知っていた。

その時々に見舞いの品は贈っていたが、皇宮に上がってから、フィリシアは一度も母と会っていなかった。

そんな事情もあったせいなのか、フィリシアは、「母の見舞い」という名目で、本当に久々に南都公家家の館に戻ったのだ。

「よく戻ってきたな、フィリシア」

そして、そんな自分を笑顔で迎えてくれたのは、やはりオリガだった。

そうして、オリガは、しばらく滞在するように言ったのだ。

ほんの数日のつもりだったフィリシアは驚いたが、「セーレン殿のためにも、頼む」と、オリガは言った。

実際、母の容態は思わしくなかった。

久々に会った母は、もともと細かった体がさらに痩せて、見ていても痛ましいくらいだった。

だが、母は見舞いに來た娘に、

「皇妃様が、このような場所に來られるとは」

と、言った。

決して、フィリシアのことを、「娘」として見ようとしなかったのだ。

そのくせ、父が見舞うと、うれしそうな表情をするのだ。

結局、母にとって、自分は手段でしかなかったのだ。

そう。最後の最後まで、父の傍にいるために、必要な「娘」だったのだ。

見舞いは、この時だけしかできなかった。

そして、部屋を去ろうとする娘に対して母は、

「良き子を、お産みになれますように」

と、言った。

それは、子を身ごもった者になら、誰でも言う言葉なのかもしれない。なかった。

だが、その時のフィリシアには、一番聞きたくない言葉でもあった。

母の前では、冷静な態度を努めるようにしたが、自分のために用意された部屋に戻ってきたとたん、もうだめだった。

部屋にあったテーブルを引っくり返した所までは覚えている。

後は、自分がどんなことをしたのか、記憶になかった。

気がついたら、

「目が覚めたか？」

ベッドに寝かされていて、椅子に座ったオリガが、静かにフィリシアを見つめていた。

「オリガ様……」

フィリシアは起き上がろうとしたが、それは止められた。

枕元には、微かにお香のにおいがしていた。

今思えば、それは鎮静の効果があるものだったのかもしれない。

「オリガ様……私は……」

「今は無理をするな。ゆるりと休め」

落ち着いた声小さな声で、オリガは言った。

「いいえ……いいえ……」

フィリシアは、その言葉に首を振った。

もう、どうしていいかわからなかった。

愛してくれない夫。

それなのに肌を合わせ、子を生む義務を求められる。

親しい人はおらず、フィリシアが欲しいものは、誰も与えてくれないのだ。

「フィリシア」

オリガは、フィリシアの名を呼んだ。

「そなたの望みは、何だ？」

「オリガ様」

「そなたが今、望んでいることを申してみよ」

そう言つて、オリガは包帯を巻いたフィリシアの手を、そつと握り締めた。

いつの間にケガをしたのか、それすらもフィリシアは覚えていなかった。

「言葉にせねば、何も伝わらぬよ」

オリガのもう片方の手は、フィリシアの頭を優しくなでてくれた。その手を見ながら、

「オリガ様……私は、子を生みたくありません」

フィリシアは、小さく呟いた。

「……そうか」

それに対して、オリガは責めることはせず、フィリシアの髪をなで続けてくれた。

その手はあくまで優しく、フィリシアは泣きたくなくなってしまった。

「他には？ 望むことはないのか？」

「その子を育てていく自信もありません……！」
「そうか」

髪の毛をなでていた手が、頬へと伸びた。

そこで初めて、フィリシアは自分が泣いていることに気付いた。

「全て、そなたの望み通りにしよう」

オリガは、フィリシアの頬をなでながら、静かに言った。

「ただ……子は、その子は、生んでやってくれぬか。せつかく宿った命じゃ……」

「オリガ様……」

「後は、全てそなたの望むとおりにしよう」

温かい手が、フィリシアの頬を包んだ。

「後は、全てそなたの望むとおりにしよう」

オリガのこの言葉に、嘘はなかった。

まずオリガは、母が亡くなった後も、フィリシアが南都公家の館に滞在できるようにしてくれた。

結局、『良き子をお産みなられますよう』というあの言葉が、母の最後の言葉となった。

父は、毎日母の部屋に見舞いに訪れていたらしい。

臨終の際には、母は父の手をしっかりと握り締めていた。

最後の最後まで、母は、「娘」よりも「夫」を求めていたのだ。

血の繋がっていないオリガの方が、よほど「母親」らしかった。

そして、そんな母親の娘である自分は、愛してくれない夫の子を生まねばならないのだ。

皮肉なものだ、と母の葬儀に参加しながら、フィリシアはそう思った。

夫も、母の葬儀に、わざわざ帝都から来てくれた。

だがそれは、フィリシアを連れ帰るためでもあったようだった。

フィリシアが、その会話を聞いたのは偶然だった。

ちょうど葬儀が終わり、自分の部屋へと戻る時だった。

「フィリシアはまだ帰さぬと、言ったはずだが？」

自分の部屋の前で、オリガが夫と話していた。

黒い喪服を着たオリガは、自分とは対象的な色の髪を持つ弟を、真っ直ぐに見上げながら言った。

とつさに、フィリシアは廊下の影に身を隠した。

「姉上……私の立場も考えてください」

「そなたの立場ごときのために、心身衰弱したフィリシアに、無理をさせると？」

「あれは、皇妃です。皇妃としての立場も、責任もあります！」

「責任……？」

夫が声を荒げた瞬間、冷静だったオリガの顔に怒りが宿った。

「ならば、そなたも今すぐ、アステインをリリースに戻すがよい」

「姉上！？」

「そなたは、あの子に何を与えておる？ あの子の一番欲しいものも与えず、『責任』だの、『立場』などと、よく言えたものだな！」

「ですが、姉上はあれと同じ立場でありながら、耐えられたではありませんか？」

夫の言葉が、フィリシアの胸に刺さった。

「問題を摩り替えるな、エド」

夫の搾り出したような言葉を、皇帝の姉でもあるオリガは、きっぱりと切り捨てた。

「あの子とわたくしは、違う。わたくしができたからと言って、あの子ができぬことを責めるのは、お門違いじゃ」

そして、そのオリガの言葉を聞いた瞬間。

体の力が、抜けるような気がした。

夫に、「姉上は耐えられたのだから」という思いがあるのはわかっていた。

そうして、フィリシア自身も、同じように思っていた。

けれど。その一方で。

どうしても、納得できない自分がいたのも、事実だった。

本当は、母にそのことをわかってもらいたかった。

だが、自分のことだけで手一杯の母は、結局最後の最後まで、そのことに気付かずに逝った。

「あの子が一番欲しいものを与えることができないのならば、それ以外であの子が望むものは、全てあの子に差し出せ。それができぬのであれば、アスティンとは別れるがよい」

それは、凜とした声だった。

いつか、こんな風になれるのだろうか、とフィリシアは思った。

こんな風に、相手が一番望むことを察知して、庇うことができる人間に、なれるのだろうか。

いや、なりたいと思った。

強く。誇り高く。そして優しく。

大輪の花のように生きる、オリガのように。

その道は、銀色に光って見えた。

まるで、銀製の盆の上を歩いているような気がした。

「オリガ様……」

自分と手を繋ぎ、前を歩いているオリガに、フィリシアは声をかけた。

「どうした？ フィリシア」

しかし、オリガはフィリシアの方は振り返らず、前を向いたまま返事をする。

それは別に、オリガがフィリシアのことを無視しているからではない。

この（・・・）場所で、フィリシアが迷わないようにするためしかなかった。

手を繋いでいるのも、そのためらしい。

辺りは白く、道のように、真っ直ぐに伸びている一本の銀色の光だけが、確かな存在のように思えた。

「オリガ様は、父上のことを愛していらっしゃいますか？」

「なんじゃ、いきなり」

答えたオリガの口調は、苦笑めいていた。

「先程の、話の続きです」

「そうじゃな……」

どこか、遠くを見つめている口調だった。

「わたくしはな、フィリシア。子どもの頃から、自分が必ず一人は子どもを生まねばならぬことを知っていた」

「それは……オリガ様の『役目』に、関係することですか？」

戦闘神が言っていた、「御自分のお役目を忘れなきよう」という言葉を、フィリシアは思い出していた。

「まあな……。まあそれで、そなたの父上に嫁ぐことになった時は、

何とも言えなかったぞ。正直好きな人の子を生むことを、幼い時は期待していたからな」

「オリガ様が？」

その言葉に、フィリシアは目を丸くした。

「意外か？　しかし、わたくしでもそのような時期はあったのじゃ。父上と母上を見ていたせいもあってな」

前に、オリガの両親である前皇帝夫婦は、とても睦まじかったと聞いたことがあった。

「せめて、政略結婚でも、父上や母上のようになれたらいいなあと思っていたら、公には愛妃―セーレン殿がおつて、あげくに、初夜に『そなたは、飾りの妃だ』と宣言されてしもうた」

苦笑しながら、オリガは言った。

そのことは、フィリシアも母から繰り返し聞いていた。

「つらく……なかったですか？」

「その時は、全くな。早々に、あきらめたからの」

「あきらめた？」

「父上と母上のようにはなれぬ、とな。だが、わたくしが公に嫁いだのは、幼くして即位するであろうエドアールの後ろ盾を得るためだったから、離縁はできなかったのじゃ」

「でも、子を生むことはわかっていたのでは……」

「だから、さつさと離縁できる状況にしよう、と思つたのじゃ。あの時は、まさか公との間に、子を生むとは思わなかったからな」

「……」

「エドアールが成長し、後ろ盾が必要としなくなるまでは、南都公主家の公妃として、できるだけのことをしよう、と思つておつた」

オリガは、初夜の父の言葉を素直に受け取り、自分の行動を決めたのだ。

そして、その通り実行したのだろう。

夫が自分のことを愛することはない、と思い込んで、ただ。父は、そうではなかった。

だから、望んだのだ、オリガが子を生むことを。

「つらかったですか？ 父上の子を……フィラルシーを生むことは」
フィリシアが小さい声で尋ねると、オリガはため息を吐いた。

「正直、な。セーレン殿に子ができたのに、何故わたくしにも子を生むことを求めるのか、全然わからなかったからな」

フィリシアとフィラルシーの誕生日は、三ヶ月しか変わらない。

おそらく父は、母に子ができたのに、嫉妬すらしめないオリガに苛立ちを感じたのだ。

いやむしろオリガのことだから、父の目の前で、喜びすらしたのだろう。

そしてそれは、父にとっては、決定的な事実を突きつけられた瞬間だったに違いない。

自分が愛する女は、自分を愛していないという――。

「だが、子を生むことで、救われもした。フィラルシーやそなたの存在があつたからこそ、わたくしは耐えられたのじゃ」

「オリガ様……」

「ただ、子を生んだからといって、離縁をあきらめたつもりはなかった。セーレン殿のためにも、時が来たら、公に言い出すつもりで事を進めてはおった」

その言葉からも、オリガが南都公主家の妃としての務めを果たす一方で、着々と準備をしていたのは、窺い知れた。

「でも……気が付かれたんですね。父上が、オリガ様のことを、愛していたことを」

そのことに気付いた時、オリガは、最初は、あまりうれしくなかったと言っていた。

「二十年は、長かった」

オリガは、ずっと自分の夫は、自分のことを愛していないと思い込んでいたのだ。

「生まれる前の記憶があっても、「神の色」を持っていても、何の役にも立たぬことは、十分に思い知らされていた。苦しい時にわた

くしを支えてくれたのは、そなたやフィラルシーの存在だった」

「オリガ様……」

「ただ……その耐えて来た人生の結果が、これであれば、それも悪くないかと思つたのじゃ。だからわたくしは今でも、公と共にある」
多分、それが、オリガの答えなのだろう。

愛している、という言葉だけでは表現できない思いが、オリガの中にはあるのかもしれない。

二十年という年月は、フィリシアが思う以上に、長いのもかもしれないかった。

ただそれでも、オリガは父と生きることを選び、セルバやまた新しく宿つた子を、産もう、と思つたのだ。

「今は、幸せですか？ オリガ様」

「そうじゃな……ただ、ずっとつらいままでもなかった。二十年間の間にも、幸せだと思ふ瞬間は、たくさんあった。皆、そうじゃと思ふぞ」

「オリガ様」

「公も、そしてそなたの母も。フィラルシーもそうじゃろうな。そして同じように、つらいこともあったはずじゃ」

一瞬、亡くなった母の姿が思い浮かんだ。

確かに、母は父から愛されなくなってしまったかもしれないが、それでも父の傍に在ることを望んでいた。つらかったかもしれないが、それでも、母は幸せだったのかもしれない。

父も、そうなのかもしれない。確かに長い間、オリガとはすれ違つていた。

けれど、それでも、オリガは父の子を産んだのだ。

「フィラルシーも……つらいことは、あつたのでしょうか？」

愛し合つていた恋人と一緒に在り、フィリシアは、幸せにやつていると思つていた。

正直、うらやましいとすら思つていたのだ。

「そなたと離れたことは、とてもつらかつたようじゃ。共にリース

に行ってくれるもの、と思っていたようじゃからの」

「え……？」

その言葉に、フィリシアは目を見張った。

「あの子にとつても、そなたは支えだったのじゃ。そなたのおかげで、あの子も随分救われておったからの」

「オリガ……様……」

「だからこそ、ロイドの養育も、あの子は引き受けたのじゃ。『今度は、自分がフィリシアを支える番だ』と、申しておった」

フィリシアは母の死後、男の子を出産していた。

名は、夫が考えていた幾つかの中から、「希望」の意味を持つ、

「ロイド」をフィリシアが選んでつけた。

母の葬儀が行われた時、身ごもっていたフィラルシーは、リースから出ることはできなかったのだ。

だが、フィリシアと前後して、男の子を出産したことを、オリガから教えてもらってはいた。

それを聞いたとたん、フィリシアは、フィラルシーに子どもを育ててもらったことを思い付いた。考えるまでもなかった。

夫や周りが連れてきた乳母に託すことは、絶対に嫌だったのだ。

自分で子どもを育てる自信がないのに、勝手なことだとはわかっていた。

だが、それだけは譲れなかった。

そのことをオリガに告げると、オリガは、『わかった』と、頷いてくれた。

そうして、その願いは叶えられ、ロイドはリースで育てられることになったのだ。

ただ表向きは、ロイドは体が弱いために表に出ることはできない、とされた。

夫は苦々しい表情をしていたが、何も言わなかった。

だから。ありがたい、とは思っていた。自分のわがままな言い分を、叶えてくれたオリガに対して。

その分、皇妃としてやるべきことはしよう、と思っていた。

だけど、フィラルシーが、そんな思いでロイドの養育を引き受けてくれていたとは、考えもしなかった。

「着いたぞ」

そうして、振り向きながら、オリが言った。

その表情は、とても哀しげで。

フィリシアは、その瞬間、初めて理解したのだ。

フィラルシーが、危篤だという意味を。

無意識の内に、考えることを避けていた。

心のどこかで、自分が行けば助かるとも思っていた。

でもそれは、幻想であることをその瞬間、フィリシアは、はつきりと理解した。

「待たせたな、フィラルシー」

ばさあつと、風がはためくような音がして、今まで見えていた白い世界が、まるで上から引つ張り上げられるようにして、消えた。そして次の瞬間には、そこは、見も知らない部屋となっていた。

「オリガ様……。フィリシア様……」

いきなり現れた二人に、驚いたようなアステインの声が聞こえた。

「フィー……。母上……」

続いて、か細い……。本当に、消え入りそうな声が、聞こえる。

幼い時から、ずっと一緒にいた。

だけど、今まで一度として、こんな弱いフィラルシーの声を、フィリシアは聞いたことがなかった。

あの凄惨な戦いの時ですら、こんな声をフィラルシーは出したことがなかった。

「フィラ……？」

信じられない思いで、フィリシアは名を呼んだ。

いつも明るく元気だった異母妹の名を。

部屋の中央に置いてあるベッドに、フィリシアは横たわっている。その姿は、自分が知っているフィラルシーではなかった。

あんなに生き生きとしていた表情を宿していた顔は、痩せこけ、青白い。

それでも紫色の瞳だけは、以前と同じ強い意志を宿していた。

「来てくれて……ありがとう……」

そう言つて、フィラルシーは手を伸ばしてきた。

その腕も細く、魔物達を相手に剣を振り回して来た手だとは思えなかった。

「フィラ……！」

フィリシアはベッドに近寄り、その手を握り締めた。

「フィラ、どうして……！」

七年前に別れた時は、こんな日が来るとは思ってもいなかった。

何故なのか。自分達は、まだ二十四歳だ。

終の別れが来るのは、いくらなんでも早すぎる。

「そんな顔、しないで……」

そう言つて、微かにフィラルシーは笑った。

「だって……だって、フィラ……」

病気だという知らせは、リースから一度として来なかった。

大きな怪我をした、という知らせも。

今日の朝、皇宮にオリガが訪ねて来て、「フィラルシーが、危篤じゃそうだ」と知らせてくれて、慌てて出てきたのだ。

現実感など、まるでなかった。

だけど、今のフィラルシーは、あの時の母と同じだった。

やせ細った顔。そして腕。

そして何よりも身をまとう雰囲気、違うのだ。

死に逝く者だけが持つ、特有の雰囲気。

母には、予感めいたものもあった。

だが、フィラルシーには、そんなものは一切なかったのに。

「ごめんね……フィ……」

「あやまらなくていいから……元気になってよ……」

その言葉に、だが愛しい異母妹は、微かに首を振った。

「ごめんね……でも……しょうがないんだ」

「そんなこと、言わないでよ……！」

小さい子のように、フィリシアは首を振った。嫌だった。自分は、母を亡くした。

母の時は、しょうがないとあきらめることができた。

だけど、今回はそうはいかなかった。

幼い時からずっと一緒にいて、苦しい時は、支えてもらった。

離れて暮らすようになって、支えていてくれた、大切な存在なのだ。

「フィー……お願いがあるの……」

フィリシアの手を離し、フィラルシーは、フィリシアの頬に手を置いた。

「子どもたちのことを……お願い……」

「フィラ……！」

「ごめんね……ちゃんと、ロイドを育ててあげられなくて……」

弱弱しく、自分の頬を押さえる手。

細い……とても、細い手だった。

フィリシアは、その手を両手で必死に掴んだ。そうして、ただ首を振り続けた。

そんなことは、ないのだ。

自分が育てることのできなかった息子を、ここまで育ててくれたのだ。

感謝こそすれ、フィラルシーが謝ることなど何一つない。

「それとね……あと一つ、お願いが……あるの……」

「何……？」

緩やかに、自分の頬をなでる手。

「幸せに……なってね……」

その瞬間、手の力が抜けた。

人が死ぬ、ということ。

それは、つい先ほどまで生きていた人間が、動かなくなる、とい

うこと。

「フィ……ラ……？」

力をなくした手。閉じられた紫の瞳。

微かに笑っているようにも見える、その姿。

「よく、がんばったな……」

ふわりと、オリガがベッドに近寄り、そうフィラルシーに声をかけた。

そうして、フィリシアの手を、ゆつくりとフィラルシーの手からはずさせた。

「オリガ……様？」

「そなたに会いたくて、がんばったのだな、この娘は」

掛けられたシーツの中に、フィラルシーの手を入れながら、オリガは言った。

「いや……」

床に座り込んだフィリシアは、首を振った。

信じたくなかった。

こんな現実など、受け入れられるはずがない。

「いや……こんなのいやよ、フィラ……！」

「フィリシア」

オリガが、フィリシアの名を呼び、抱きしめてきた。

「オリガ様っ……！」

フィリシアは、その腕の中で、声を上げて泣いた。

今日、自分は一番大切な者を失ったのだ。ずっと一緒だと思っていた者を。

「フィラ……フィラ……！！」

冷たい石畳の床の上で、フィリシアは泣き続けた。

愛しい者の名を呼びながら。

そして、それは。第四代皇帝妃・フィリシアが、人前で泣いた唯一の姿でもあった。

後に。

彼女の息子である第五代皇帝・ロイドは、己の皇妃に、こう語っている。

『オレが初めて見た母親の姿は、泣いている姿だったよ』と。
だが、それは、まだ未来の話である――。

フィラルシーの命は、本来ならばあの魔物との決戦の時に、失っていたのだ。

だが、フィラルシーにも課せられた「役目」があつたのと、エステファンが残された自分の「寿命」を使う決断をしてくれたおかげで、あの戦闘神が、フィラルシーを蘇らせてくれたらしい。

だから。

エステファンが死んだ後、二日後にフィラルシーが死んだのは、「寿命」だったのだと。

そう、オリガは言った。

実際、エステファンにしてもフィラルシーにしても、ほんの数日前までは、元気だったのだ。

それゆえにリースの者達も、本当に二人の相次ぐ死には、大きな衝撃を受けていた。

考えもしなかった、というのが本音だろう。

「……オリガ様は、いつからそのことをご存知だったのですか？」
雪の降る外を、温室の窓越しに見つめながら、フィリシアは言った。

リースの館の中庭には、小さい温室が建てられていた。

そこには、雪が深いリースでは、なかなか見られないという、小さい花の鉢が、幾つか置かれていた。

この温室で、花の手入れを、フィラルシーはよくやっていたと、アステインは言っていた。

葬儀の準備が進む中、「客人」としてのフィリシアやオリガは、リースの者達が気を使わないように、与えられた客間にいた。

だが、フィリシアは降ってくる雪を見つめていると、どうしてもじっとしていられなかった。
だから。

思い余って、館の庭に出て――温室があるのに、気付いたのだ。そこには、オリガが先客として来ていた。

温室は、エステファンが何か「力」をかけていたのか暖かく、外では雪が降っているとは思えないほどだった。

しばらくの間は、二人とも黙っていたが、やがて、オリガが話し出したのだ。

フィラルシーが、エステファンと残りの寿命を分け合っていたことを。

その話を聞いて、フィリシアは最初、オリガは何もかも知っていたのではないかと思った。だが、オリガの返事は意外なものだった。

「ここに来る時じゃ。アルロと話していて、気が付いた」

「え……？」

その言葉に、フィリシアは振り返った。

アルロとは、あの戦闘神のことだ。

「姉上も、わかっていらつしやるはずです。あの娘は、夫と共に己が役目を果たしました。その役目を果たした今、我らが世界に戻るのが道理と言うもの」

その瞬間、フィリシアは戦闘神のこの言葉を思い出す。

「あの子の果たす『役目』は、確かにあった。だがその『役目』を果たす前に、あの子は一度、死んだのじゃ。だからこそ、アルロはエステファンの『寿命』を使い、あの子を甦らせたのじゃろう。…

…死に逝く者を甦らせるのは、本来は許されぬ」

そう言っただけで、温室の中央に置かれた、ピンク色の花を咲かせた鉢に手を触れた。

「私の命を、使ってくれたら良かったのに」

だが、ボツリと呟いたフィリシアの言葉に、オリガは、はっとなって顔を上げた。

「そうでしょう？ オリガ様。私の命の分も、使ってくださいれば、フィラルシーは……っ」

「そのようなことを申すな、フィリシア！」

そして、フィリシアの言葉を遮るように、オリガは言った。

「オリガ様……」

「そのようなこと、あの子は望んでおらぬっ」

それは、とても厳しい声だった。

「では……私は、これから先、どう生きればいいのですか？」

「フィリシア……」

「フィラルシーがいないのに……どう、生きろと言われますか!？」
ずっと、自分を支えてくれていた存在は、もういないのだ。

皇妃という重圧に耐えられたのは、「フィラルシーのために」と
いう思いがあつたからだ。

それは、確かにつらいことだった。

だが、それ以上に、フィリシアは、戦いで傷ついたフィラルシー
を、見たくはなかつたのだ。

「ならば、自分のために生きたらどうじゃ？」

ピンクの花の鉢の前にしゃがみ込み、オリガはそう言った。

「オリガ様……？」

「花はな、フィリシア。自分のためだけに咲く。人間がその花を見
て、どう思ふのかなど、考えもせぬ」

「……」

「そなたも、自分のために生きたらよい。それが、フィラルシーの
望みでもある」

『幸せに、なつてね』と。

それが、最後の言葉だった。

「そなたにしかできぬ生き方で、幸せになつてみるがよい」
ピンクの花を優しく触りながら、オリガは言った。

「私に……できるでしょうか？」

「できるに決まっておるうが。そなたは、おそらく自分で思ってい
る以上に強いぞ」

「そうでしょうか？」

「ああ。そういうところは、セーレン殿によく似ておる」

そう言って、微かにオリガは笑う。

その表情は、哀しげでもあった。

その瞬間、フィリシアは気付いたのだ。

自分は、愛しい異母妹を亡くした。

そして、オリガは、愛しい自分の娘を亡くしたのだ。

だけどこの女性^{ひと}は、己が抱える「哀しみ」を、自分の前では表さない。

多分……フィリシアの前で自分が泣いたら、よけいにフィリシアを哀しませてしまう、と思っっているのだ。

「そなたにしか咲かせぬ花を、咲かせてみる。わたくしとも、フィラルシーとも違う花を」

哀しみを内に秘め、それでも微笑むオリガは、とても美しかった。と、その時だった。

キイと音を立て、温室のドアが開いた。フィリシアは、視線をオリガからそちらの方に移した。

「ロイドか」

しかし、オリガの方が、先にその子の名を呼んだ。

ドアが開いて入って来たのは、自分と同じ茶色の髪と、夫と同じ、青い瞳を持つ子どもだった。

フィリシアは、その子が三ヶ月になった時に南都公主の館から皇宮に戻り、それ以後一度も会っていなかった。

その後すぐ、ロイドはリースから迎えに来たフィラルシーに、託されたからだ。

母親として、接することがほとんどなかった我が子を、フィリシアは見つめた。

「あの……お客様です……」

少し緊張した声で、ロイドは言った。

「客？」

聞き返したオリガに、ロイドは頷いた。

「僕達の、お爺様だつて……」

「公が、着いたようじゃな」

そう言つて、オリガは立ち上がった。

父も、わざわざ南都の方から葬儀に参加するために、訪れることになつていたのだ。

「私が、行きます。オリガ様は、こちらでお待ちください」

フィリシアはそう言いながら、ロイドの方に、一歩進み出た。

その瞬間、ロイドはビクツとなった。

その反応に、一瞬、フィリシアは胸の痛みを感じた。

だがそんな反応をした我が子を、責めることはできないことは、わかつていた。

ずっと、母親として接していなかったのだ。

それなのに、いきなり「母親」と言われる人間が現れて、とまどうのは、むしろ当たり前のことだろう。

五年前。

あの場所で、フィリシアは自分を保つことが精一杯だった。

ロイドを育てる余力は、どこにもなかった。

その事實は、今でも変わらない。

でも、支えてくれた、あの明るく優しい異母妹は、もういないのだ。

「案内してくれますか？ ロイド」

努めて落ち着いた声で、フィリシアは言った。

ロイドは、緊張した面持ちでフィリシアを見ていたが、こくんと頷いた。

「こつちです、……母、様」

どこかきこちなく、ロイドはそう言った。

ロイドに続いて外に出ると、雪が頬に当たった。

白い息を吐き、ロイドはフィリシアの前を歩いていた。

その歩き方は、しっかりと歩いていて、時々こけそうになる自分とは、大違いだった。

それだけ、このリースの暮らしに馴染んでいるのだろう。

フィリシアも、そしてロイドも何もしやべらず、黙って歩き続けた。

「フィリシアか」

そして、父は中庭の手前の通路に、案内もつけずに来ていた。だがその腕の中には、もう一人の孫である幼子がいた。

金色の髪と緑の瞳を持つ彼は、父親とよく似ている。

「父上が、呼びに行かせたのですか？」

フィリシアは、自分の娘の忘れ形見を抱く父に、少しだけ目を見張った。

愛情深いオリガはともかく、父は、あまりそんなことをする人ではなかったはずだ。

「そなた達が、部屋にいなかったからな。客室に戻ろうとしたが、この子達と廊下で会って、一緒にそなた達を探しておった」

「この人、僕のおじい様なの？」

父の腕の中の幼子が、少し小さい声で、フィリシアに聞いた。

その声は、幼い時のフィラルシーに似ているような気がした。

「そうですよ、アルロ。この人は、あなたのおじい様に当たる人です」

幼子の名は、「アルロ」と言った。

あの戦闘神と同じ名を、どうしてフィラルシーとエステファンが付けたのか、フィリシアにはわからない。

いつか、わかる日が来るのだろうか。

「そしてな、この人は、お前の伯母上に当たる人だぞ。お前の従弟のロイドの母様だ」

父は、そんなことを腕の中のアルロに言ったが、その言葉を聞いたとたん、ぴくりつと体を動かしたのは、父のすぐ傍に立っていたロイドだった。

「父上…… オリガ様は、温室にいらっしゃいます」

そう言って、父の抱くアルロに手を差し出した。

「フィリシア？」

「行つて差し上げてください……あの方は、私の前では、泣けませ
ん」

その言葉に、父ははつとした表情になった。

「……多分、父上の前でしか、あの方は泣けないのでしょうか」

実の娘を亡くして。哀しくないはずがないのだ。

前世が神であろうが、不思議な力があるうが、実の娘を助けるこ
とができなかったのだ、あの女^{ひと}は。

理性では、きっとわかつていいるだろう。

だが、感情は。心の底にある、思いは。

「わかつた」

父は頷くと、アル口をフィリシアに渡し、中庭にある温室へ、雪
を踏みしめながら歩いて行つた。

「……ロイドの、母様？」

緑の瞳が、どこか不思議そうにフィリシアを見た。

「違うよっ……」

だがそれを遮るように、ロイドが言つた。

夫と同じ青い瞳が、涙ぐんでフィリシアを見上げていた。

その言葉に、ショックは受けなかつた。

それが当たり前であることを、フィリシアは十分にわかっている
つもりだつた。

アル口を抱きかかえたまま、フィリシアはロイドの傍に座り込ん
だ。

「私は、あなた方の母親の姉になります。伯母上でも、フィリシア
でも、好きに呼びなさい。無理に、母様と呼ばなくてもいいです」

その言葉に、幼子二人は互いの顔を見合わせた。

「ただ……傍には、いてくれますか？　そして、話してください。

あなた方が知っている、フィラルシーとエステファンのことを。あ
なた方のお母様とお父様の話を、私にたくさんしてください」

冷えた廊下から見える中庭には、まだ雪が、たくさん降り続けて

いる。

この寒いリースで、フィラルシーはどんな風に生きていたのか。どんな風に子ども達を育てたのか。

抱いていたアルロが、そっとフィリシアの頬に手を触れた。

そうして、そつとなでてくれる。

フィリシアは、その時初めて、自分が泣いていることに気付いた。

『ごめんね……ちゃんと、ロイドを育ててあげられなくて……』

最後の最後まで、優しかった異母妹^{いもうち}。

遺していく子ども達にも、きつと、何か言い残したいことはあっただろう。

だがそれ以上に、自分のことを案じてくれたのだ。

案じて、最後の言葉を残してくれたのだ。

『幸せになってね』と。

「フィラ……」

残された子ども達を抱きしめながら、静かにフィリシアは泣き続けた。

多分これが、子ども達の前で泣く最後の姿になるだろう、と思いつながら。

白い三人分の息が冷えた空気の中に舞い上がり、そして混じり合いつながら、やがて消えていった。

「離縁？」

その言葉を皇妃が口にしたら、皇帝の表情は変わった。

恋人でもあり、主君でもある男の後ろに控えながら、アステインは、異母妹を悼むために喪服のドレスに身を包んだ皇妃を、信じられない思いで見つめた。

「ええ。もちろん、今すぐにはありません。ですが、あの子達が無事『成人の儀』を迎えたあかつきには、私は、皇妃の座から辞させていただきます」

「何を馬鹿なことを……」

皇妃から視線を逸らしながら、どこか喘ぐような声で、皇帝は言った。

「いえ、まこと眞実のことです。私は、皇妃の座を、辞させていただきます」

それに対し、皇妃は茶色の瞳を真っ直ぐに皇帝に向けている。

「我が国に離縁をした皇帝夫婦など、おらぬっ」

たまりかねて、皇帝は叫んだ。

「前例など、作ってしまえばよろしいのですよ、陛下」

しかし、皇帝の怒鳴り声に臆することなく、皇妃は言った。

「それにあの子達が成人するまでに、十年はあります。ある程度の手を打つには、十分な時間ではありませんか？」

「フィリシア……」

呆然となり、皇帝は皇妃の名を呼ぶ。

「何故だ？ 何故、そなたは離縁など望む？」

「陛下。私は、自分の一生を、全てあきらめて過ごしたくはないのですよ」

「子は？ ロイドやアルロは、そなたを支えるものではないのか！？」
そう。

今の皇宮には、皇太子として戻って来たロイドと、その遊び相手として、リースから引き取られたアルロがいるのだ。

アルロを皇宮に引き取ることは、最初アステインは反対した。

『何故だ？ 『文始めの儀』が済んだら、ガレリーナの訓練のために、皇宮に上がるだろう。それが少し、早くなっただけじゃぞ？』

皇帝の姉であるオリガは、アステインにそう言った。

『オリガ様。アルロは、このリースの跡継ぎです。跡継ぎの者が、領地から離れることは、好ましいことではありません』

『では、そなたは、リースに残るのだな？ あの子が無事、成人するまで』

だが、次の瞬間、オリガの言った言葉は、衝撃的だった。

『オリガ様……？』

『そうであろう？ あの子は、父母を亡くしたばかりの幼子。まさかあの子を一人、このリースに残し、おめおめと皇宮に戻るつもりではおるまい？』

艶やかに笑いながら、オリガは言った。

今までアステインが皇宮専属のガレリーナとして、恋人である皇帝の傍にいたのは、一重にエステファンとフィラルシーが、このリースを守ってくれたからだ。

それが二人亡き今、残されたのは幼いアル口と自分のみ。

だがアステインには、皇宮での役目があった。

それに、魔物の活動も収まった今では、リースを守るには、信頼できる家臣達にアル口を託しても、十分にやっていけるはずだった。

『信頼できる家臣は、このリースにもおりますっ』

『父母を亡くしたばかりの子を、たった一人残すと？ それでそなたはいいが、アル口はどうであろうな』

容赦のない追及を、オリガはした。

水と平和の神・ユスと同じ黒髪・黒い瞳を持つ彼女は、情の深い優しい人だと思われがちだ。

だが、その一方で。

人を容赦なく追い詰め、自分の思い通りに事を進める策士家の一面も、持っていた。

これは、皇宮の重臣達ならば、誰でも知っていることだった。

『皇宮であれば、叔父であるそなたも傍におるし、共に育ったロイドや、伯母であるフィリシア、大叔父のエドアールもおる。決して、悪い話ではないと思うがの』

言葉にしたらその通りだが、ようは、アル口を皇宮に連れて行かないのならば、お前は皇宮から出て行け、と言っているのだ。

そうして、その通りにこの女はするのだろう。

弟である皇帝がいくらそれを阻止しようとしても、効果はない。

特に、自分の存在を苦々しく思っている家臣達には、絶好の機会となるはずだ。

アステインは結局、アルロと共に皇宮へ戻るしかなかった。

しかし、後から思い返してみると、オリガが自分を脅してまでアルロを皇宮に引き取らせたのは、確かに幼いアルロを案じたこともあるだろうが、おそらくは、フィリシアのためだったに違いない、
と思い付いた。

仲の良い異母妹を亡くしたフィリシアが、哀しみに負けずに、生きていけるように。

そうして、半ば脅すようにアステインに言ったのも、ああ言えば、アステインが罪悪感を抱かずに済む、と判断したからだろう。

わかつてはいる。自分の幸せは、この皇妃の哀しみの上に成り立っていることを。

だが、恋人と離れることはできないのだ。
だから。

ロイドやアルロが傍にすることで、皇妃が少しでも救われるならばーと、リースの者達を説得したり、頻繁に戻り、領主代理の仕事もこなしたりしていたのだ。

「子は、いつまでも傍にいるものではありません。いつかは、巣立ちます」

迷いのない声で、皇妃は言い切った。

「フィリシア……」

絶句する皇帝に、皇妃は微笑んだ。

「私は人形のまま、一生を終わるつもりはありません」

そうして一礼すると、そのままきびすを返して、部屋を出て行った。

苦い表情のため息を吐く恋人を横目で確認しながら、アステインは、皇妃を追いかけた。

「お待ちください、皇妃様っ」

声をかけると、廊下を歩いていた皇妃は、振り返った。

肩に流した茶色の髪がふわりと揺れ、茶色の瞳がアステインを見た。

「どうしたの？ アステイン」

……一瞬、時が戻ったのか、と思う。
あの頃。

こんな風に、皇妃はアステインに話しかけていた。

「フィリシア様……」

それに釣られ、つい昔の呼び方をしてしまう。だが、すぐにそれに気付いた。

「皇妃様……本気なのですか？」

「離縁のこと？」

「はい……。何故に、離縁など……」

この国では、離縁はほとんどない。

まして、皇帝夫婦が離縁するなど、前代未聞だった。

おそらくは、とても「恥ずべきこと」として、国民達には受け取られるだろう。

だが、皇妃は「フィリシアは静かに笑った。

「アステインは死ぬ前に、誰と話したい？」

「え……？」

その問いに、一瞬、アステインは戸惑った。

そうして、すぐに恋人の顔を思い描く。

亡くなった双子の兄も、亡くなる直前には、やはり死の淵にいる自分の愛する妻の名を呼んでいた。

自分や、子ども達が傍にいたのにもかかわらず。

「フィラは……死ぬ前に、私と話をしたけれど」

フィリシアは、アステインの義理の姉のことを、「フィラ」と愛称で呼んでいた。

そして、フィラルシーも、フィリシアのことを「フィー」と呼んでいた。……とても仲が良い、姉妹だった。

だから。

フィラルシーが、フィリシアと話した直後に死んだことも、わかるような気がしていた。

だがフィリシアは、思いもかけないことを言った。

「本当は……きつと、子ども達と話したかったんだと思う」

「フィリシア様」

「だけど、それ以上に、あの子は私のことを案じてくれていたのね。だから最後に、私と話すことを選んでくれたのよ」

声もなく、アステインはフィリシアを見つめた。

「でも……死んで逝く母親が、最後の最後に、子どもに言葉を遺せないって、こんな馬鹿な話がある？ それぐらい、私はあの子に心配をかけていたのよ……」

フィリシアの声は、震えていた。

「フィリシア様……」

「だから、決めたの。もう二度と、あの子に心配をかけるような生き方はしないって。でないと、きつとあの子はいつまでたっても私を心配して、エステファンのところに、絶対に行こうとしないから」そう言いながらも、茶色の瞳からは、涙が流れ出していた。

しかしその姿は、とてつもなく美しかった。

八年前のあの戦いの時も、死に逝くガレリーナの仲間を抱きしめて、微笑みながら彼女は泣いていた。

その姿も、とても美しかった。

『ただ今、戻りました……』

担架に乗った仲間は、フィリシアと会うこと、それだけを望んで皇宮に戻ってきた。

あの頃。

ガレリーナの誰もが、皇宮で自分達を待っているフィリシアを、支えとして戦っていたのだ。

それは、自分もそうだった。

そして、着ていた服が血だらけになろうが、ためらいもなく死に逝く仲間を抱きしめることができるフィリシアだからこそ、皇妃にと、誰もが望んだのだ。

フィリシアが、どんな生き方を望んでいるのか、アステインには

わからない。

だが、自分の恋人を……夫を愛しているからこそ、「離縁」を望んだことだけは、わかっていた。

決して、フィリシアは、認めはしないだろうけれど。

去って行くフィリシアの後姿を見送りながら、アステインは頭を下げた。

あの頃と変わらず、「アステイン」と自分を呼んでくれた皇妃に、静謐に咲く花のごとく、誇り高く生きる女性^{むすめ}に。

後に。歴史書は、伝える。

第四代皇帝・エドアール二世の皇妃、フィリシアのことを。

初めて、アリシア帝国で離縁をした、皇妃として。

夫のエドアール二世と離縁したのは、皇太子・ロイドが「成人の儀」を迎えた半年後だった。

その後、実家の南都に戻り、南都の都カルガ郊外の、小さな離宮で暮らしたらしい。

離婚後の彼女のことは、子どもや女性の教育活動にとっても熱心に取り組んだこと、彼女の甥・アル口の娘である第六代皇帝サリアが即位する時に、初の女帝の誕生を洩る臣下達を、彼女が積極的に説得していたことぐらいしかわかっていない。

そして、サリア皇帝の御世に亡くなったとされている。

だが、晩年の彼女に仕えた侍女の一人が、自身の孫達に、離縁した後のフィリシア皇妃のことを、よく語って聞かせていたらしい。

その人によると、フィリシアは自分が率先していた教育活動で、毎日とても忙しそうにしており、優雅な貴婦人の生活などは、縁がなかったようである。

それに、ロイド皇帝の御世には、よく第五代皇帝妃・ミズが、サリアや子ども達を連れて訪ねてきたらしい。

しかも、それは夫婦喧嘩をしての家出で、迎えに来たロイド皇帝とフィリシアは、傍に控えている者達が、噴出すのを必死になって

堪える会話をしていたと、その人は笑いながら孫達に語ったそうだが、
そうして驚くことに、その頃のフィリシアには、夫がいて、その
人との間に娘を一人、生んでいたらしい。

だが、これら全てのことが、歴史書には、何一つ記載されていない。
い。

本当かどうか、今ではわからない。

ただ、この人は、フィリシアについて、こうも語っていたそうである。
ある。

「フィリシア様は、いつも笑顔でいらっしゃったのよ。とても、楽しそうに毎日笑っていらしたわ」と。

あとがき

ここまで読んでくださった皆様、ありがとうございました。

このお話は、もともと高校生時代から考えていたストーリーがありまして、そこからよきつと生えて、だんだんお話ができて行っただという、ちょっと変わった過程で生まれました。

そのお話で出てくるフィリシアは、女傑で、「どうしたら、こんな性格になるのかなあ」と思っていたら、どんどんお話が膨らんでいったのです。

特に最後、アステインに見送られるシーンは、このお話が生まれた時から、頭に浮かんでいました。

実際に書き上げたら、伊藤由奈の「I m H e r e」が浮かんで、作者ながら、「フィリシアかつこいい〜」と思ってしまいました。

なので、このお話は女傑の人が、いかにして女傑になっていったかという話でもある、と言っていると思います。

でも、こう書くと、じゃあ、このお話には続編があるの??と、思われそうですね。

まあ……あることは、あります。ちよつと名前だけ出てきた、「ミズ」。この子が主人公のお話です。

ただ、このミズが主人公のお話、今の時点でも原稿用紙千枚は行くかもしれない、と思うぐらいの長編になりそうなのです。

そうになると、まだまだ時間がかかると思います。

現在、資料集めをせっせつとしております。

自分でも希望的観測を持ちつつ、やっておりますので、いつかは発表したいです。

そこでも、フィリシアは出てきますが、今回の話とは打って変わって、かなりすごい人になっています。まあ、幸せにやっています、とだけは言えますね。

とりあえず、この世界のお話は、一旦ここでお終いとします。

また、皆様にこの世界で会える日を楽しみにしたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6551d/>

誇り高く、静謐に咲く花

2010年10月8日10時28分発行